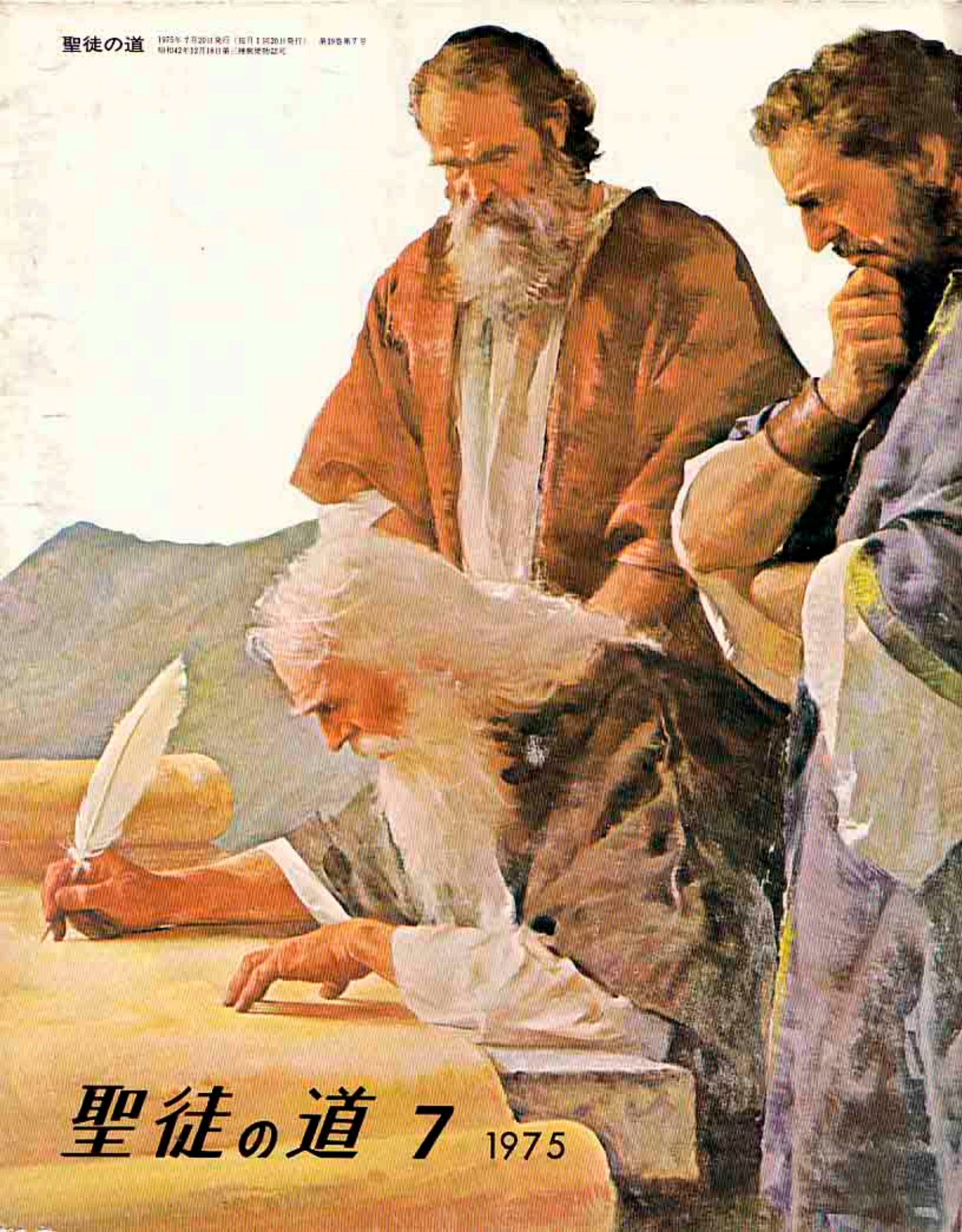
聖徒の道 1975年7月20日発行（毎月1回20日発行） 第19巻第7号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可



聖徒の道 7 1975

子供を教育することとは

第一副管長
N・エルドン・タナー

私たちは明日の役員、教師、宣教師、あるいはステーキ部長、伝道部長、地区代表、教会幹部となる神の霊の子供たちを教えているのだということを自覚し、そのことをいつも心に留めておくことが大切である。彼らは将来、社会あるいは国家において責任ある地位に就くであろう。何という大切な責任であろうか。私たちは子供たちに彼らの持つ重要な義務と責任とを教えながら、同時に彼らが求める幸福をもたらすものを教えたいと願っている。

子供が幸福でよく調和のとれた大人に成長するには、達成すべき目標を設定することが必要である。何も成し遂げず、何の働きもせず、それでいて心から幸福感を味わいながら目的のない人生を送ることのできる人などだれもいないのである。子供というのは目標を選ぶに際して指導を必要とするものであるが、子供が自分自身や社会に対して最大限寄与することのできる様々な素質や技能を見出し、それを育てていくには理解と忍耐を必要とする。気長に絶えず耳を傾けて、子供が心の中で何を考え何を最も必要としているの

かを知らなければならない。

ここで、子供に耳を傾けるときの簡単な規則を取り上げてみよう。例えば何か願い事を言ってきたような場合、私たちは自分の手を休めて子供の言葉に熱心に耳を傾け、口をはさむのではなく質問によって私たちの理解を示すことである。そして子供自身とその子の問題に心からの関心を示す。このようにするとき、私たちは本当の意味で子供を理解し、子供が問題を解決したり目標を設定したりする上で、また人生における自己の役割を見出す上でいかに援助できるかを知るのである。

幸福の探求に際して最も大切な要素は訓練であるが、私たち自身が教える事柄の生きた模範でなければそれは最も困難なこととなる。愛を示し愛について教え、正直で尊敬される義しい市民になるよう教育すること以上に大きな責任はない。また子供を教育する上で、親たる者、教師が子供に期待する人間像そのものであること以上に強力でかつ効果的な方法はない。子供は私たち自身のようになるのである。

（1973年10月5日、日曜学校中央大会での説教から）

7月号

もくじ

家族に流れる海流……スペンサー・W・キンボール…290
新しい観点からみた大西洋の横断……ポール・R・チェスマン…294
ワシントン神殿献堂式の祈り……297
日々の恵み……301
イザヤ書を理解するための10の鍵……ブルース・R・マッコンキー…302
おもちゃばこ……309
とみ子ちゃんのまほうのペット……ポール・レマン…310
小さなお友だちへ……313
ほしまつり……マーガレット・K・ホルツ…314
質疑応答……エリス・ラスムセン…317
「しもべは聞きます」……S・デルワース・ヤング…318
八福の教え……Q・レスリー・ストーン…321
理由がありますか……ビクター・ブラウン…324
平和の祝福……フランクリン・D・リチャーズ…327
義にかなう事柄を続けて行なう……レックス・D・ピネガー…329
キリストに対する証詞……ジョセフ・アンダーソン…332
ローカル・ニュース……334

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
（内務伝達部長）
ジョン・E・カー
（配送翻訳部長）
ドイル・L・グリーン
（教会誌編集主幹）
ダニエル・H・ラドロウ
（教会教課企画調整主任）

国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼　修　一

聖徒の道 7月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－10－25
定　価　年間予約1,700円　1部 150円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE　Printed in Japan

家族に流れる海流

家庭と家族とは、私たちを神に導く強い力を生み出すものでなければならない

スペンサー・W・キンボール大管長

私は初めて氷山を見たときのことを、今でもはっきりと覚えている。1937年、キンボール姉妹と私は汽船でカナダのモントリオールを出航し、セントローレンス川から北大西洋へ抜けて、初めて大西洋を横断した。

セントローレンスを抜けてかなり沖合いを航行していたある日、船内にちょっとした興奮が巻き起こった。氷山が見えたのである。船客の大半はデッキにかけのぼって見物した。氷山は遠くに見えていた。青空を背景に暗い海上にそそり立つ真白な大氷山が。

高山のけわしい峰のように海の中をゆっくりと流れていくさまは、実に壮観だった。それまで話に聞いてはいたが、そのとき初めて、現実に自分の目の前に、氷の険しい頂が姿を見せたのである。

そのとき私たちの胸に浮かんだのは、ホワイトスター汽船のタイタニック号が、処女航海で悲劇の沈没を遂げたことであった。1912年4月4日の夜遅く、かの建造新たな大型客船は巨大な氷山に衝突した。1503名の乗客は英国と合衆国の名士が多かったが、沈没と共に海中に引き込まれ、救助された人はわずかに703名であった。

そして、今から4年ほど前、私たちはイギリスから合衆国に向かう飛行機でグリーンランド上空を越え、再び氷山を目にした。空路はほとんど分厚い雲の上だったが、グリーンランド上空を飛んだときには空が晴れあがり、雲ひとつなかった。太陽はまぶしく輝いており、あのように雄大で美しい光景はめったに見られるものではない。はるかに広がるのは、巨大な島をおおう何キロもの氷のじゅうたんであった。厚い氷河がゆっくりと谷から海に進み、砕けて氷山になっているのも見えた。フィヨルドは、大洋目指して流れてくる氷の山でびっしりと埋まっていた。そこが、33年前に見たあの無数の氷山の生まれ故郷だったのである。

グリーンランドの氷の原から生まれた氷山の進路は明らかであった。ゆるやかなラブラドル寒流はバフィン湾とデービス海峡を通って絶えまなく南下しながら、風と波と潮の勢いにも負けず巨大な氷山を運ぶのである。海流は、表面を吹く風よりもずっと大きな力で自分の道を進む。

この自然の相克を、私たちは自分の生活にひき比べて考えた。親の正しい教えによって家族に生じる生活の海流が、誤った世のおびただしい悪影響の波風にも負けず、子供の進む方向を意のままに導くことは、幾度もあるであろう。

私たちの見るところ、海の波の下にはおろそかにできない力が存在し、また、私たちの生活にもそのように強い力が存在する。

強大なミシシッピ川も、大海流に比べれば小川同然である。海流の中でもことに壮観なのがラブラドル寒流だという。それに次ぐのがメキシコ湾流で、この海流はメキシコ湾の東側から合衆国東岸に沿って北上し、大西洋をまたいでヨーロッパ沿岸を暖める暖流である。このメキシコ湾流はミシシッピ川の1千倍の水量を運ぶ。また、規模からいえばそれに劣りこそすれ、ラブラドル寒流は年々何千の氷山を、生まれ故郷のグリーンランドから、メキシコ湾流と出会って溶けるまで、確実に忠実に運び続けている。かのタイタニック号が悲運に殉じたのは、ちょうどラブラドル寒流とメキシコ湾流が合する地点であった。

私たちの道が、自分ではほんの一角しか認知していない力によってかなり左右されるということは、氷山と同じである。またしかし、私たちが氷山よりは船のようであるのも確かである。私たちには自分で動く力があって、海流に気づきさえすればそれを都合良く利用もできるのである。

このように、もし私たちが正しい生活という目標に向かって流れる強く確実な海流を、家族の中に生み出せたならば、親も子供も、困苦や落胆や誘惑や時流の逆風にも負けずに、前進できるであろう。

若者も大人も、ときにはいつまで続くだろうかと疑わしく思うような、実に多くの渦巻く風に身をさらしている。時流の風は不安で仲間に受け入れられたいと思っている人々を押し流す。性の誘惑の風は結婚生活を破壊し、輝ける未来を廃虚と化し、人々を堕落させる。悪い仲間、幻覚剤、瀆神行為、ポルノグラフィー ――これらは、もし私たちが正しい生活に向かう強く確実な海流に乗っていなければ、私たちを押し流して行ってしまうであろう。私たちは親として、家族の一員としてふさわしい生活を営むことにより，生活の海流を定め、それを強力にしなければならないのである。

私たち一人一人には、清く神聖で真実な、世の中から独立した力強い神となる可能性が宿されている。私たちは聖典から、自分が永遠の存在で初めに神と共にあったことを教えられている。(アブラハム3：22参照)そのことを知

ると、人の尊厳について他と異なる認識が生まれるのである。良い家庭の子供たちが反抗したり、道を踏み誤ったり、罪を犯したり、あげくのはては神と争ったりもするのを、私はしばしば目にしてきた。海流を起こそう、模範になって教えようと自分の最善を尽くしてきた両親は、それに大きな悲しみを受ける。しかし、よくあることだが、その子供たちの多くが、迷いの年月を過ごした後に、心を和らげ、失っていたものを悟り、悔い改めて社会の霊的面に大きな貢献をするのである。それはなぜかといえば、いろいろな逆風が吹きつける中で、彼らは自分で意識する以上に大きく、自分の家庭で培われた生活の海流の影響を受けていたのであろうと思う。後日、彼らが自分の家庭の中に父母の家庭と同じ雰囲気を持ちたいと望むとき、きっと両親の生活に意義を与えた信仰に立ち返ることであろう。

もちろんのこと、正しい両親でも必ず子供を掌握できる保証はないし、できる限りのことをしないならば、子供は遠のいていくであろう。

だがもし、私たちが親として子供たちに影響を与え、「狭く細い道」へ導くことをしなかったなら、そのときには、悪と誘惑の波風が子孫を道から連れ去るに違いない。

「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない」。(箴言22：6)私たちの知っていることは何かといえば、子供に良い影響を及ぼそうと努める正しい両親は終わりの日に咎なしとされ、全員とは言わないまでも、子供たちの大半を救いに導くだろうということである。

モーサヤ書に、人の心の相克が述べられている。

「肉欲に従う人は神の敵であって、アダムの堕落してこの方そうである。しかし、人がもし聖霊の導きに従い肉欲に従うことをすてて主キリストの身代りの贖罪に由って聖徒となり、幼児のように従順で柔和で謙遜で忍耐で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従しないならば、とこしえに神の敵となるであろう。」(モーサヤ3：19)

「肉欲に従う人」とは、動物的な情欲に負け、霊的な心を曇らせてしまう「この世的な人」である。

数年前の外国旅行でのことだが、その国の公立学校に通う子供たちがクラスで宗教に対して絶えず集中攻撃を受けているということを聞かされていたので、私はどのようにして子供たちを教会につなぎ、信仰を守ってあげられるのかと教会の指導者に尋ねたことがあった。すると彼らはこう言った。「真理と誤りの区別ができるように、家庭でよく教えるのです。学校に行って聞かされる無神論がそのまま耳から耳へ通り過ぎるように。子供たちは私たち親を愛し、信頼して、信仰をしっかり守ってくれています。」神はあのように忠実で献身的な親たちを祝福される。

まず第一には、永遠に添い遂げるために自分を合わせていこうとする努力が見られる地に足のついた結婚である。このような健全な基盤があってこそ、子供たちは平安を得るのである。

現代社会の分析家は、急激に変化する世の中で、人々は連帯感の喪失からある種のショックを受けていると指摘する。容易にまた敏速に動けるという社会の可動性は、子供たちがあちこちによく移動して、祖父母、おじ、おば、いとこといった近親者や旧来の隣人との接触を失っていくことをも意味する。私たちは自分の家族に、自分たちが永遠に一緒なのだという気持と、外部でどんな変化があろうとも、家族関係は決して変わらない基本的なものだという意識を養うことが、また大切である。私たちは、子供が親戚の人たちを知るように努めるべきである。彼らの話をし、文通しようと努め、訪問をし、家族の輪に加わるなどが必要である。

体の大きさはどうあれ、あなたが子供たちを腕に抱いて、その子を愛しており、永遠に一緒にいられるのがうれしいと話しかけたのは、最近ではいつのことであったろうか。ただ喜ばせたいからと、とりたてて理由もないのにちょっとしたプレゼントを伴侶のために買ってきたのは、いつのことだっただろうか。一輪のバラを持ち帰ったり、特別な料理を作ったり、生活に愛と暖かさを加えるちょっとした行為を、最近ではいつしただろうか。

建築資金や赤十字に寄付をしたり、土曜日に長老定員会で未亡人の家のペンキ塗りを手伝うといった計画があったなら、子供たちにもその話をし、できれば計画の決定や実行に参加させなさい。家族にバプテスマや確認の儀式や按手聖任を受ける人がいたなら、家族みんなでその会に出席できるし、野球チームに入っている子供には全員で声援を送ることもできる。家庭の夕べや食事どきや祈りのときにはいつも全員が顔を合わせるし、みんな一緒に什分の一を納め、教えと模範でこのうる

わしい原則を学ぶこともできる。

家庭は、主に頼ることが日常の自然な経験となる場でなければならない。そのためのひとつの方法は、毎日の熱心な祈りである。ただ祈るだけでは十分でない。親である自分が知らなければならないこと、家族のためにしなければならないことを啓示して下さるという信仰を持って、実際に主に話しかけることが大切なのである。ある人たちは、祈っていると、子供が目をあけて主が本当にそこにおられるのを見たがったという。それほどにじかで率直な祈りだった。

子供が家を離れて学校や伝道に行く、妻が精神的に疲れている、子供が結婚する、大切な決断に助言を求められたなど、いずれの場合にも父親は祝福師の責任を行使して家族を祝福することができる。

また、忘れてならないのは、特に父親不在のときに、母親が子供たちと共に祈って子供のために主の祝福を呼び求めることである。母親は神権によってではなく、一家を正しく治めるという神から与えられた責任によって、それを行なうのである。

私たちが氷山とは異なっているひとつの大切な点がある。私たちには、自ら動く力があり、そのため船と同じように、望むところへ動いて行くことができるのである。海流に気づけばそれを利用することもできる。南米から北米の大西洋沿岸港へ航行する巨大なオイルタンカーや鉄鉱積載船は、ちょうど飛行機がはるか上空のジェット気流に乗るように、メキシコ湾流を利用すると言われている。

もし海流に逆らいたければそれもできよう。しかし海流の力は絶大である。ピアリー提督が北極に向かったとき、島のように大きい流氷に乗っているのに気がつき、犬を連れて北極をめざしたが、流氷は海流のため、それよりもずっと速い勢いで南に流れていったという。

兄弟姉妹たち、家庭は私たちの宝である。家庭そして家族は、私たちの依って立つ基盤である。そのことを、今度の大会では幾度も聞いた。家庭生活、互いに愛しあい頼りあう親子について。それこそ、主が私たちのために計画された生き方である。

さて、3日間にわたり多くのことを教えてくれた盛大な大会の終わりにあたって、尽力された兄弟たち、また話を通じて知識と多くの情報と豊かな霊感の宝を私たちに与えてくれた兄弟たちに祝福を差し上げたい。

兄弟姉妹たち、帰宅しても、大会を扉の外に閉め出さないでいただきたい。自分の身につけて、家に持ち帰ってほしい。教会員家族にその話をし、聖餐会でも一部報告をしていただきたいと思う。だがとりわけ、あなた方の家族に話をして、あなた方が受けた霊感、生活を変えて天父にさらに喜ばれるようになろうという決意からもたさられる恩恵を、家族に与えていただきたい。

今大会の最後に、私たちはあなた方を祝福し、天なる主の祝福を与える。兄弟姉妹たち、私はこれが主のみ業であることを知っている。あなた方は、わけもなくわざわざ遠くからやってきたのではない。自分の魂を養いにやってきたのである。

私は主が生きておられることを知っている。アダムと共におられた神、ヨルダン川のほとりに来て、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」（マタイ3：17）と言い、御子を世に紹介され、世はその御子に行く末をすっかり託されることとなったその神が生きておられることを。また、私たちが拝むのは、変貌の山に来て、主のみ業に不完全ながら携わるはずのペテロ、ヤコブ、ヨハネのしもべたちに再度、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」（マタイ17：5）と言われたその神であること、そのまったく同じ神、私たちがその存在を知っている神、ニューヨーク州に来て、昔ニーファイ人に告げたと同じことを告げ、長い間暗黒をさまよっていた世に「こはわが愛子なり、彼に聞け」（ジョセフ・スミス2：17）と言われたその神であることを、私は知っている。

イエスはキリストであり、生ける神の御子である。私はそれを知っている。私たちの教える福音がイエス・キリストの福音であり、私たちの属する教会がイエス・キリストの教会であり、教会がイエス・キリストの教義とイエス・キリストの方針とイエス・キリストの計画を教えていることを、私は知っている。もし私たちが皆、主からすでに与えられた計画や将来与えられる計画にそのまま従ったならば、すべての約束は成就されるのである。神はあなた方を祝福しておられる。私たちは愛と感謝と共に、主の祝福をあなた方に残すものである。御子イエス・キリストのみ名によって。アーメン。

（1974年10月6日（日）第144回半期総大会午後の部における説教）

新しい観点から見た大西洋の横断

ポール・R・チェスマン

「この件については、もはや議論の余地は全くないと断言できます。教条的に却下することはもう許されません。コロンブス以前にアフリカ、地中海、東洋から人が渡ってきたという説は、現在では不承不承ながら受け入れられています。……」

これは、1973年にジョージア州ランプキンで開かれた「コロンブス以前の大西洋横断」と題するセミナーの席上で、ジョセフ・メンハン博士が述べた言葉である。

このセミナーで、ブリガム・ヤング大学の4人の教授モンテ・ナイマン、ロバート・パーソンズ、ロス・クリステンセン、それに私を含めた150人の出席者が、合衆国全土から集まった25人以上の学者の発表を聞いたのであった。その内容は1830年にモルモン経が全世界に宣言したものと全く同じであった。すなわち、アメリカインディアンは、旧世界から渡ってきた古代の移民の子孫であるというのである。

コロンブス以前に大西洋を横断した移民があったことを証明する数々の証拠が、セミナーの開かれた3日間に提出され、検討された。その中には、古代の貨幣、鉄製品、石あるいは金属版に刻まれた文字も含まれていた。

このシンポジウムで提出された資料を分析した結果、3つの結論に到達したが、いずれもモルモン経の研究にとって重要な意味を持っている。

第一の結論は、古代のアメリカ人は文字を持っており、記録を残したということである。

セミナーで提出された発見物のうち、この結論に導く重要なもののひとつは、ハーン刻板であった。ウェスト・ジョージア単科大学で古代史を教えているY・リン・ホームズ教授が、1933年にジョージア州のある花壇で発見されたこの小さな鉛版について紹介した。刻まれた文字はスメル語の楔型文字と呼ばれる字体で、内容は羊の売買に関する事柄であることがわかっている。内容は重要ではないが、古代の文字が書かれた金属版が北アメリカで発見された事実は重要である。

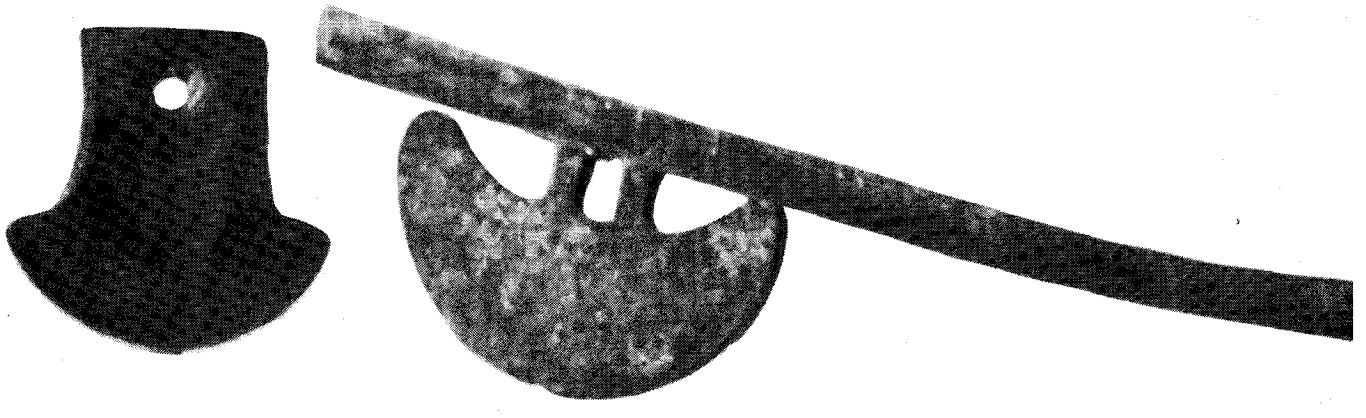
続いてシンポジウムの議長であるメイハン博士とマンフレッド・メトカーフ氏が1966年にジョージア州フォート・ベニングで発見された同様の発見物「メトカーフ石」について紹介した。この石には、紀元前1400年頃近東で使用されていた文字が刻まれている。しかしこの25×22×20センチ大の石に刻まれた文字はまだ翻訳されていない。

ニューヨーク市の著名な考古学者でありまた研究家であるサイラス・ゴードン博士は、もうひとつの発見物「バット・クリーク石」について紹介した。1880年代にテネシー州で発見されたこの石は紀元前100年頃に作られたものでローマ帝国下地中海沿岸地方にたどることのできるヘブル語が記されている。

このセミナーで到達した結論のうち、モルモン経を研究する者にとって特に興味ある結論の第二は、コロンブス以前のアメリカ人が鉄器を使用した可能性が大きく取り上げられたことである。古代のアメリカ土着民が鉄生産に必要な技術を持っていたことは、明らかな事実である。モルモン経には鉄器の製造と使用についてはっきりした記録がある。

ジョージア州カスバートのアンドリュー単科大学で学部長を務めるダグラス・T・ホールデン博士は、合衆国で発見された金属の遺物に関する博士の研究結果を発表した。ホールデン博士は、テネシー州最高裁判所長官ジョン・ヘイウッド氏の重要な発見について、次のように報告している。

「ヘイウッド氏は、……彼ら〔チェロキー族のインディアン〕の説に、東方からの移民、カインとアベルやバベルの塔の話に似た物語があることを発見した。また、ひとりの白人が、失われた、もしくは時間の経過と共に埋もれてしまった一冊の書物を回復するという話もあった。ヘイウッド氏は数多くの道具を発掘したが、最も興味のあるものは



鉄器である。

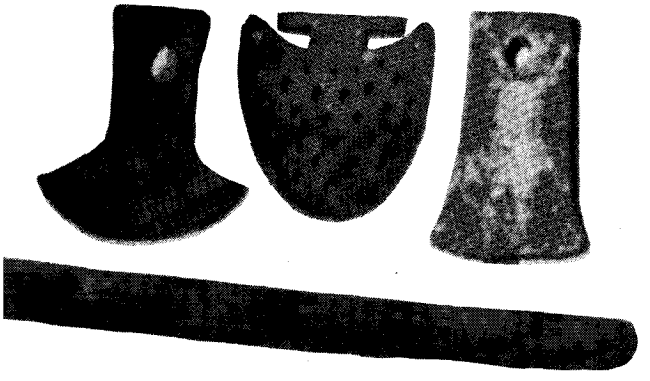
続いてホールデン博士は、コロンブス以前の鉄の斧と槌がミズーリ州とノースカロライナ州で発見された次第を紹介した。ニューヨーク州のほぼ同じ場所から鉄のかなとこと先がはがねになった鉄の手斧が発見されている。

オハイオ州で古代の溶鉱炉が幾つかとテネシー州フェイエットビルでコロンブス以前の短い鉄剣が発見されている。ケンタッキー州では、鉄の手斧と鉄製腕輪が出土している。腕輪のうち4つは女性の遺骨の左腕についていたものである。同じくケンタッキー州で発見された手斧は、200年以上の樹齢を数える直径2メートルの木のまん中にあった。

ホールデン博士によると、サイラス・トマス氏がのみ、ナイフ、腕輪も含む古代の鉄器の発見について1880年に本にまとめて出版したということである。ジョージア州で鉄の装飾品が発見され、バージニア州で鉄の釘、びょう、座金、大釘、のみが発見されている。翻訳されたモルモン経の中に鉄器が登場したため予言者ジョセフ・スミスが詐欺師呼ばわりされたこと（当時鉄は近代になってはじめて得られたと考えられていた）を考えると、これらの発見は私たちの確信を大いに強めるものである。

セミナーで到達した第三のそして最も重要な結論、すなわち、古代のアメリカ人は大西洋あるいは太平洋を渡って旧世界から来たという説は、最初のふたつの結論によって支持されている。またユダヤ人の地と北アメリカの間に見出される幾つかの興味深いつながりによっても支持されている。

ホームズ博士は、インディアンの間に伝わっていた経札（腕に巻きつける生皮で作った小箱）から記録された文書が発見された事例を2件報告した。箱の中には、モーセの五書を一部写した羊皮紙の断片が入っていた。ひとつはマサチューセッツ州ピッツフィールドで発見され、羊皮紙にはヘブル語が書かれていた。もうひとつの経札から発見された羊皮紙には出エジプト記と申命記から抜粋したヘブル語が書かれていた。これは1854年にカンサス州フォートレベンワースで発見されている。



ダグラス・C・ブレースウェイト博士は、1803年以来北アメリカで発見されたローマの硬貨とユダヤの硬貨の写真を紹介し、解説した。ノースカロライナ、ジョージア、テネシー、ミズリー、オクラホマ各州からローマの硬貨が、ケンタッキーからユダヤの硬貨がそしてアラバマでシラクサの硬貨がそれぞれ発見されている。ブレースウェイト博士は、「もはや北アメリカの前史を論じる者は、……硬貨の発見に言及しないですますことは許されない」と述べている。

地中海の地域で作られた硬貨が発見されていることや、鉄器、炉が発見されていることは、コロンブス以前に人々が大西洋を横断し、移民した事実を裏づけるものである。

セミナーの中で私はブリガム・ヤング大学を代表し、幾つかの点について発表する機会を得た。私は聴衆にモルモン経について話そうとしたが逆に古代アメリカとモルモン経について紹介した映画「古代アメリカは語る」を上映するように求められたのであった。私たちは丁重に受け入れられ、教会に関する数多くの質問に答えることができた。

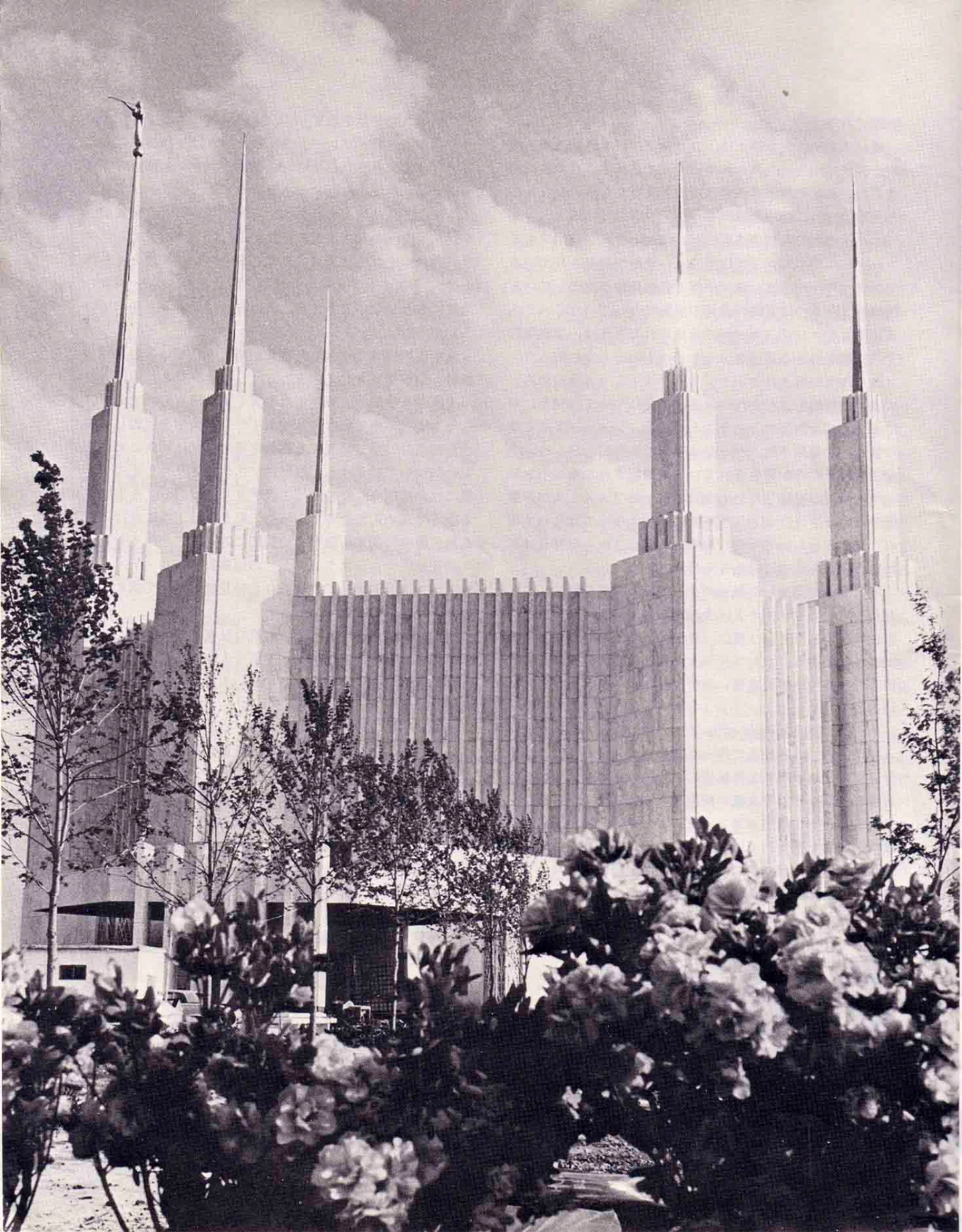
研究誌「マニュスクリプト」の編集長ポール・V・ラッツは、このセミナーで検討された発見物について次のようにまとめている。

「シンポジウムで取り上げられた証拠品の一部または全部について、その真ぴょう性を疑う人がいるだろう。しかし、物件の数の豊富さに、心の広い人ならだれでも再考の余地が十分あると思うに違いない。」

セミナーで見聞きしたことを思い返してみると、最近10年をとっても、コロンブス以前の大西洋横断を示す証拠品に対する科学者や学者の見解が大きく変わってきていることに目を見はらざるをえない。このセミナーの結論が出た以上、従来上に述べたような点からモルモン経の真ぴょう性に挑戦してきた批評家は、この古代の記録の再検討を迫られることだろう。

上記の発見は必ずしも人の考えを変えないかもしれない。しかし論究を促し、この時代の最も重要な書物であり、強力な衝撃を与える記録であるモルモン経を読みたいという気持を私たちに起こさせるに違いない。

（ポール・R・チェスマン博士は、ブリガム・ヤング大学で古代の聖典を担当する准教授であり、同大学のモルモン経研究所所長でもある。また博士はブリガム・ヤング大学第7ステーキ部のステーキ部長である。）



ワシントン神殿

献堂式の祈り

ワシントン神殿の献堂式は、1974年11月19日から22日の4日間にわたって挙行され、アメリカ合衆国東部およびカナダ東部に住む約4万名の教会員が参列した。

この献堂をもって、ワシントン神殿は、今日運営されている第16番目の神殿となったのである。

10回に及んだ献堂式はすべてスペンサー・W・キンボール大管長が奉献の祈りを捧げた。11月19，20日の両日に各3回、21、22日の両日には各2回の献堂が行なわれた。

教会員は、各ワード部で監督から入場券を受け、儀式の部屋、講話室、食堂、聖会室を含む神殿の各部屋で、献堂式に参列したのである。

各式典では、献堂の祈りに加えて、教会幹部の説教が行なわれた。なお、この献堂式には、十二使徒補助のアルマ・ソニ、七十人最高評議員会のミルトン・R・ハンター会長を除く、教会幹部全員が参列した。

教会幹部以外にこの4日間にわたる式典で説教をした役員は以下の通りである。神殿の建築士を代表してフレッド・A・マーカム、神殿地区委員会会長を務めるバージニア州オークトンステーキ部のジュリアン・C・ローステーキ部長、十二使徒会地区代表のロバート・W・バルカー。

神殿地区の各地方で編成された80名の聖歌隊が合計10組織され、それぞれ発表した。

遠隔地からの出席者はワシントン地区の教会員から宿の提供を受け参列した。

献堂式に先立ち7週間にわたって行なわれた神殿の一般公開には、75万8,322人の訪問者があった。

献堂後、生者と死者のための神殿の儀式は、エドワード・E・ドルリー・ジュニア神殿長の指示のもとに執行されている。

天地とその万物と、我らが霊の創造主なる天の聖き父よ、至高の栄光と、全き憐みと愛と真理に満てる父よ、汝が大いなる愛子イエス・キリストのみ名によりて、我らはこの麗わしき宮居にて汝がもとにぬかずき、生ける神なる汝にこの宮居を奉献し奉る。

愛する父よ、我らは汝が聖きみ名をあがめ奉る。汝が民をしてこの地を再び見出させ、民に大いなる国を建てさせ、自由を認むる憲法を制定せしめたまい、かくして大いなる福音と、汝が愛子の教会を回復せしめたもうた汝に感謝し奉る。

我らは今、汝を愛し奉る汝の民の犠牲によりて建てられたるこの美わしい宮居を汝に奉献し奉る。

世の救い主として汝が独り子を世に遣したまいしこと、み業を回復せしめんがため古えより召したまいし予言者ジョセフ・スミスを遣わしたまいしこと、汝が愛子が天降りて予言者を訪れ、悪をくじき、天よりの啓示によりて汝と汝の御子と汝の聖き目的を世に知らしめたまいしことに我らは感謝し奉る。

汝が息子ジョセフ・スミスと彼の殉教せし後今日まで後継せし者たちが汝の啓示を受け、かくして神権、使徒職、神殿の業および真理にして完全なる福音のすべてが回復せられ、聖き人らが生者と死者に永遠の生命を得させんためあらゆる貴き業と王国の鍵を授けせしめしことに感謝し奉る。

我らは、金版が守られ、よって最も正しき書物なるモルモン経がその輝やける真理と共に回復せられ、イスラエルの家に「主の誓約を悟り、……又イエスは永遠の神なるキリストにましますことをユダヤ人と異邦人とに認めしめ」たもうことを感謝し奉る。(モルモン経の序)

父よ、我らは汝が聖きみ名をあがめ、栄光と力と支配のうちに座し、力と栄光とを注ぎたもう汝を日毎讃美奉り、汝が我らを助けたまいしことを固く覚え、かくして我らは道をはずれることなく汝の聖なるみこころをすべて果たすべく、汝を信ずる信仰を増し加えん。

我らの父よ、汝の戒めを守り、汝のみこころに従い得るよう恵みたまえ。我らが完き悔改めをなすとき、我らの罪を赦し、汝が忠実なる者に約したる豊かな恵みにあずからしめたまえ。

父よ、我らは知る。邪悪なる者どもが飢饉、疫病、貧窮、悲痛、戦争をその罰として受けしことを。汝の民が悔い改め、汝の戒めに従い、我らが今日見しところの者共と異なり、災いを避け得んことを祈り奉る。

父よ、我らは、この世にひろがりし邪悪、不敬、堕落、不浄、不品行に深く心を痛むるなり。我らは古えの都市が破壊され、町々が破られ、建物が倒され、民が敵国に連れ去られて奴隷となりしことを知る。地を人々の汚れより潔めんがために大洪水がありしことを覚ゆるなり。今日我らは古えのあらゆる罪の眼前に展開さるるを見るなり。人は自らの称せる自由を崇拝し、破滅に至る道を愚かに歩み居るなり。父よ、願わくは彼らが義をもて汝のみ前に帰るべく祝福したまわんことを。

父よ、我らは今日の政治界に憂いを覚ゆるなり。国々はいと小さき火にても戦争と荒廃と破滅への道へ走らんとせるなり。国々を導く者を祝福したまいて、彼らが義にかないて思慮をもちて治め、汝の民に真理と義にかないて汝を礼拝する自由を与えんことを祈り奉る。父よ、我らを壊滅の淵に追いやらんとする権力を阻止したまえ。

我らが父よ、あらゆる民が信仰によりて立ち、栄えんことを願い奉る。

地における汝が王国の指導者を祝福し、汝の思いとみこころを知らしめたまえ。彼らが今日も明日も世の終りまでも義にかなわんことを。

父よ、民が繁栄を受くるも、彼らをして偽りの神々を拝せしむるほどの羊と牛、地と小屋と富を与えたもうな。

人々が悔い改め、汝に従わんとするとき、父よ、憐みをたまえ。汝が殺りくの天使をとどめ、汝の民を赦したまえ。主よ、悔い改めし者が苦しみを受け、道を改むるとき慈悲を垂れたまえ。

慈しみ深き父よ、我らは汝の御子の戒め「全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣伝えよ」を覚え奉る。(マ

ルコ16：15）

父よ、我らがこの戒めを成就せんがために捧ぐる力はいと小さくして未だ汝の報いを受くるにふさわしからざるなり。而して、汝の民なる我らが固き決意を持ちて必要なる犠牲を捧げ得るよう力を垂れたまえ。我らが息子らが義のうちに成長し、世の国民に福音を携え行くにかなう霊の完成目指して力を尽くし得るよう祈り奉る。

恵み深き父よ、国々の門の鍵をはずし、扉を開きたまえ。さらには、王、大統領、皇帝、閣僚の心を和らげ、かくして我らが福音を宣べ伝うることを許されんことを願い奉る。

父よ、願わくは世の数知れぬ人々を祝福したもうて、彼らが真理を受け入れ、また宣教師にとりて、陽の沈むことなく、汝の福音を誤りなく世に伝え得るよう、彼らをとどめる者のなきよう祝福したまえ。父よ、殊に海外にある汝の民の子らがこの聖なる業に専心し得るよう祝したまえ。我らが義を果たさざるとき、我らの務めに目を開かせたまえ。我らがくじかれしとき、扉を開き、門を開きて、汝のしもべらの証で全地をおおわしめたまえ。

全能の父よ、我らをして、汝よりいかに助けを受けておるかを思い起こさしめ、汝への信仰を強めさせたまえ。汝の力強き腕、荒野の燃ゆるしばに現わされしこと、汝その力もてエジプトに捕われしイスラエルの子らを解き放ちたること、汝が荒れる海よりノアとその子らを救いたること、リーハイの家族をして未踏の砂漠と海を渡らしめたること、ダニエルをライオンの檻にて守りたること、汝、獄の扉を開き、また近代の聖徒らをして平原を踏破せしめ、山間地方に導きたること。我らはこれらを覚ゆ。

我らはこれら汝がみこころの数知れぬ顕現により、汝が門の鍵をはずし、扉を開きたまい、かくして我らが汝の愛子が定めたまいし計画を世に携え行くを得るを知る。我らが宣教師が真理の証を携えてあらゆる国に行き、苦難を切り抜け得るよう導きたまえ。

天の父よ、我らはレーマン人に心を注ぎ居るなり。彼らに聞く耳と悟る心を祝し、信じる心を与えたまえ。彼らが汝と交わり、あらゆる「他の神々」と迷信と恐れを捨て去り、汝のみこころに沿って進み行くよう恵みたまえ。願わくは、彼らが主の誓約を知り、福音を信じ、イエス・キリストの功徳に頼り、主のみ名を信じる信仰によりて高められ、自ら悔い改めることによりて救われんことを。

恵み深き父よ、汝の指導者たちを祝福したもうよう祈り奉る。我らはジョセフ・スミスよりハロルド・B・リーに至るすべての大管長に感謝し、彼らが汝の業に多くを成し遂げたることを感謝し奉る。願わくは現在の大管長を祝し、彼とその副管長に汝の思いとみこころを表わし、彼らがひとつとなりて地上における汝の計画を霊感に従いて導き得んことを。彼らに知恵、判断力、平安、守り、霊感、啓示を祝福したまえ。また、十二使徒にも同様の祝福がありて、全世界の人々に汝の福音を携え行き得んことを。彼らに汝の聖き啓示のあらんことを。大祝福師、十二使徒補助、七十人最高評議員会、管理監督会、十二使徒会地区代表、ステーキ部、伝道部指導者、ワード部、支部、教育関係組織、補助組織、その他汝の教会を成長発展せしむるために一致して働くすべての汝の民を祝福したまえ。

この神殿の神殿長会、介添役、その他職員を祝福したもうよう祈り奉る。彼らに知恵を授けたまえ。すべての儀式が清く霊的な雰囲気のもとに執行され、もって人々にこの場にあらんことを望ましむるよう、この地に聖なる精神を創り出す彼らを祝福したまえ。また、警備に立つ者、この建物のすみずみに心を配る人々の上に祝福のあらんことを。

我らの父よ、霊界にて待つ数限りなき者たちのために、汝の御子が獄の扉を開きたもうたことを感謝し奉る。

願わくは、この神殿を汝の宮居となし、烈しき風の吹きたる如くに、力と栄光とを持ちて、天使らが汝のおとずれを携え来たらんことを。

聖なる父よ、我らは感謝し奉る。汝がペテロ、ヤコブ、ヨハネを地上に遣わして、メルケゼデク神権と使徒職を汝の僕ジョセフ・スミスらにもたらし、我らにそれらを授けしを。

父よ、我らは大いなる関心を持ちて我らがユダの兄弟らを見守りたるなり。我らは彼らが受けし迫害、苦悩、災い

を見、祈り奉る。すなわち、彼らが福音を信じ、汝の御子を救い主として受け入れ、贖われん時の速かに来たらんことを。

結び固め、結婚、灌油、その他の儀式を受けんとてこの宮居に来たる者たちを祝福したまえ。願わくはこの宮居を祝福したもうて、祈りの家、断食の家、信仰の家、栄光の家、永遠の結婚の家、結び固めの家、神の家、汝の家となり、数限りなき死者に代わりて生者が救いの儀式を執り行なわんことを。

この宮居に来たりて、その手を挙ぐるとき、彼らの手が聖くあり、聖からざる者が汝の宮居に入りて汚すことのなきよう祝福したまえ。

聖なる父よ、汝の僕に就きて嘘言、偽りを言う者をくじき、困惑させ、恥辱を着せ、彼らの試みを壊滅させたまえ。

父よ、この最も選ばれたる地に建てられし大いなる国を祝福したまえ。この国の大統領、国会議員、司法省、内閣、立法府、州、郡、都市の行政官を祝福したもうて、引き続き自由が我らの礎石とならんことを。

聖き父よ、我らの嘆願を聞き届け、悔改めを受け入れ、罪を赦し、我らが努力に力を貸したまえ。聖き御座にましまして、栄光と誉と権能と威光と勢いと支配と真理と正義と審きと愛憐と完全なる無限とをもて、とこしえよりとこしえにしろしめたもう天より汝の祝福を注ぎたまえ。

偉大にして愛に満ちたもう父よ、この宮居を嘉納したまえ。我らはこれを汝の聖くして義なる目的のために奉献し、汝のみ名を冠し奉る。我らをして、汝と子羊にホザナと歌わしめ、汝の油注がれたる者が救いの衣をまとい、汝の聖徒らをして喜びの声をあげしめたまえ。

父よ、汝の僕らの手に成るこの家を、汝がとこしえに住まう宮居として嘉納したもうよう祈り奉る。

父よ、この建物の礎石から冠石に至るあらゆるものを受け入れ、清め、聖別したまえ。最も低きにある礎石より、モロナイ像の立ちたる最も高き尖塔に至るすべてを受け入れ、守りたもうよう願い奉る。

ここに造られたる壁がくずれることなきよう、仕切り、床、屋根、橋路、エレベーター、階段を祝福したまえ。照明、暖房設備、ボイラー、発電器、接続管、電線、灯火、家具、あらゆる種類の物を祝福したまえ。

さらに、とばり、祭壇、幕、敷物、浸礼盤、牛、貯蔵所、保管庫、記録、文書を守りたまえ。また、あらゆる備品、座席、クッション、かけもの、錠前、装飾品を含む器具、付属品、木製、金属製の物品、刺しゅう細工、絵画、彫像、絹、羊毛、綿に至るすべてを祝福したまえ。

ガラス、陶磁器、その他宮居のすべてを嘉納し、聖別し、守りたもうよう、我らはへりくだり奉献し奉る。

父よ、我らは、汝の僕とはしためが祝福と結び固めを受けんがための祭壇を差し出し、これらが聖く保たれんことを祈り奉る。

我らは建物と共にその敷地、歩道、垣根、植込み、樹木、草花、カン木を献納し奉る。願わくは、これらが美しく花開き、人々の目を喜ばしめこの丘が平安と憩い、聖きことを黙想する楽園とならんことを。

父よ、我らは願い奉る。この建物と設備とが、火災、洪水、自然の猛威、落雷、暴風、地震による変動、その他の障害から損傷を受け、破壊されることのなからんことを。主よ、この宮居を守りたもうよう乞い願い奉る。

慈しみ深き父よ、汝の王国の民があらゆる国にてもろもろの血族、もろもろの国語の民および世の人々と共に、汝の聖きみ名をほめたたえさせたまえ、我らが汝の王座と神の子羊の前にて声高らかに、「救いはみ座に坐したもう我らの神と子羊にこそ在れ」と叫び、「讃美、栄光、知恵、感謝、尊貴、能力、勢威、世々限りなく我らの神にあれ」と言わしめたまえ。

我らはここに、汝が与えし聖なる神権の権能によりて、この建物と建物に関するあらゆるもの、すべての備品と内部に納められしものを汝、我らの聖き父に献納し、汝の祝福のあらんことを乞い願い奉る。汝の愛子イエス・キリストにして我らの贖い主の尊きみ名により願い奉る。アーメン。

日々の恵み

末日聖徒一人一人の胸には、福音に従い、主を愛することによって得た日々の経験が刻まれているものです。これはだれもが持っている物語です。証を強くした経験、祈りが答えられたこと、愛する家族や友人の受けた霊感、神権の祝福、補助組織についての経験を他の教会員と分かち合いましょう。下記の宛先に原稿をお寄せ下さい。

〒106　東京都港区南麻布5－10－25　中正堂会館

末日聖徒イエス・キリスト教会翻訳事業部　八木沼修一

読み方を教えてくれたモルモン経

イルマ・デ・マッケナ　（チリ）

「姉妹、もう読めるんですよ！」

私は驚いて彼女をみつめました。彼女は顔中の小じわをくしゃくしゃにして笑いました。キプー支部扶助協会の昼食会での出来事です。

「でも、メジナ姉妹……どうして……」と、私は口ごもりました。

「いえね。だれにも秘密にしときたかったの。だって恥ずかしかったもの。」彼女はそう答えました。

アナ・デ・メジナ姉妹はニコニコと人なつこいお年寄りでした。でも心臓病のためにその呼吸は不安定でした。彼女は他の支部から移ってきた未亡人で、子供たちはみな福音を拒んでいました。そのため、たいがいはひとりでバスに乗って教会に通っていたのです。

「でも、メジナ姉妹、読めないって、どうしてもっと早く教えて下さらなかったの？　お宅にうかがって教えてさしあげたのに。」

「姉妹、ほんとにありがとう。お気持よくわかるわ。でも私、主の助けをいただいてモルモン経を読めるようになろうと思ったの。」

私は夢を見ているような気持でした。メジナ姉妹は扶助協会に熱心に出席していて、私が霊的生活の教師をしていたので、ときどき聖句を読んで下さいと頼むと、いつもにっこり笑って「ごめんなさい。読めないんですよ」と返事していたのでした。そのとき私は、目がよく見えないか、眼鏡を忘れたのだろうとばかり思っていたのです。

それから彼女は私にその理由を話してくれました。幼ないときに彼女の両親は、女の子に教育はいらないと考え、彼女に家事ばかりを教えてくれたというのでした。

宣教師が訪問したとき、彼女は宣教師の話に熱心に耳を傾け、その話が本当であることを感じました。そこで宣教師が帰ると、彼女は娘にパンフレットを読んでもらいました。このような方法でレッスンが続き、宣教師は彼女が字を読めないことに少しも気づきませんでした。彼女は言われたことや教えられたことをみな覚えようと努めたのです。やがてモルモン経について話すときがきて、彼女にモルモン経が手渡されました。それが苦痛の始まりでした。

彼女はモルモン経を高価な宝物のように受け取ると、美しいカバーをかけて、マントルピースの上に置きました。そして時折震える手で本を取り、いとおしげになでたりしました。そしてその貴重な宝物を自分で読めない悲しさに涙を流していたのです。

こうしたある日、彼女はそれ以上がまんできなくなり、ひざまずいて、光にこのように近づいているのだから闇の中から救われて宝の本が読めるようにどうか助けて下さいと、主に懇願したのです。

ある日、彼女は娘に、モルモン経の出だしのほんの少しだけ読んでもらいました。「私すなわちニーファイは善い父母から生まれたので……」。彼女はこの言葉を、何度も何度も繰り返しました。それから一字一字をよく見て、どんな形でどういう意味なのかを考えました。彼女はその言葉を暗唱して、字を覚えたのです。

それから彼女はまた娘に、次の文章を読んでもらい、同じようにしてそこを何度も繰り返し、ひとつひとつの文字の輪郭を頭に刻み込みました。ゆっくりと、一行一行進んで、聖典に繰り返し出てくる言葉はそれとわかるようになりました。間もなく、彼女はスペイン語の語順を理解するようになりました。まずつづり字を分解して、次に文字を結びつけ、同時に発音も覚えました。

彼女の勉強ぶりは驚くばかりで、日に日に少しずつ大好きなモルモン経が読めるようになったのです。そしてついに、どこでも読めるすばらしい瞬間がやってきました。彼女は、こうして読み方を習得したのでした。

そのときから、メジナ姉妹は知識に飢え渇くようにモルモン経を読み、次に教義と聖約に入り、数々の霊感による教えを読み続けたのです。

メジナ姉妹は、今はこの世にいません。しかし、会うたびごとに見せたあの幸せそうで元気な顔は今も目に映り、こんなことを読みましたよとうれしそうに話してくれる姿が浮かんでくるのです。

イザヤ書

を理解するための10の鍵

十二使徒評議員会会員
ブルース・R・マッコンキー

私たちの永遠の救いが、イザヤ書をニーファイと同じように深く正確に理解する能力があるか否かにかかっているとすれば、私たちはニーファイと共に主の楽しい法廷の前に立つとき、いったいどうなることだろうか。ニーファイは確かにイザヤ書を深く正確に理解していた。また主はイザヤ書について「まことに偉大なる価値あり」(Ⅲニーファイ23：1）と言っておられる。

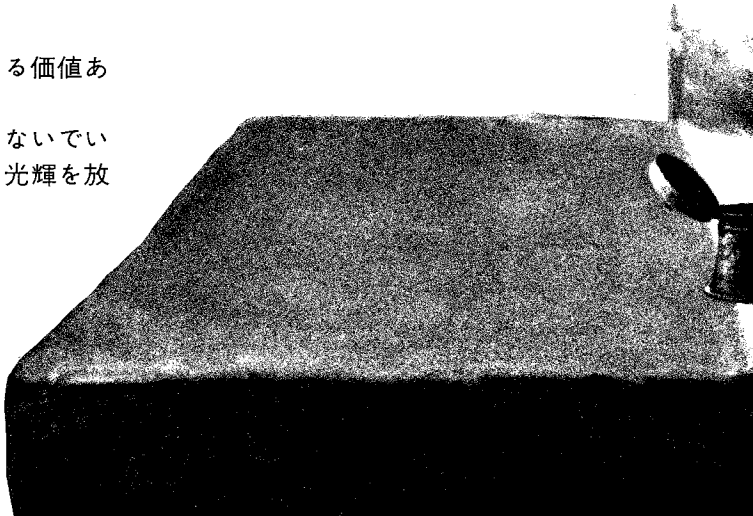
しかしレーマンとレミュエルにとって、イザヤの言葉は封じた書物同然であった。若いニーファイのふたりの兄は、イスラエルの偉大な聖見者が書いた文字を読み、理解することはできたが、しかしそこに含まれている本当の予言の意味をくみ取ることはできなかった。未知の言語で記された言葉を読んでいるかのようであったからである。

復活された主は、ニーファイ人と、私たちを含めたイスラエルの全家に向かって、さらにすべての異邦人にもイザヤの言葉を熱心に研究するよう命じられた。主は言われた。「イザヤは、イスラエルの家に属せるわが民につきて一切のことを語りし故に、イザヤが異邦人にも話しかくるべからざるはもとよりなり。イザヤの予言ことごとくはその通り事実となりたらずとも、将来必ずことごとく事実となるべし。」(Ⅲニーファイ23：1－3）

レーマンとレミュエルは、今日のキリスト教界を象徴する原型である。ふたりは永遠の破滅に通じる下降の道をたどっていたので、霊的な識別の力を欠いていた。そのために、この古代の予言者の難解な教えを理解することが、全くと言ってよいほどできなかったのである。

父のリーハイは、「まことに偉大なことを多く兄弟たちに語ったが、それは人が主に尋ねなければ解りにくいことで

「イザヤの言葉は、まことに偉大なる価値あり」とニーファイは書いている。
多くの人がイザヤの予言を理解できないでいるが、イザヤの「予言の言葉は明るく光輝を放っている。」



あった。」そのときふたりの兄は、父の教えに背き、主に頼ることを拒み、父の教えの本当の意味を理解しようとしなかった。ニーファイはふたりに「主に尋ねたか」と聞いている。それに対しふたりは、「主に尋ねてはいない。主はこんなことをわれわれに知らせないからである」と答えている。

そこでニーファイは、主なる神御自身の言葉で、人が啓示された言葉の本当の意味を知るための法則と、事実知ることができるという大きな約束を次のように引用している。「もし汝らその心をかたくなにせず、答えを受くと信じ、固き信仰を持ち、わが誡命を勤勉に守りてわれに願わば必ずこれらのことを汝らに示さるべし。」（Ｉニーファイ15：１－11参照）

ニーファイはまたこうも言っている。「私の心はまことにイザヤの言葉を喜ぶ。」（IIニーファイ25：５）個人的な気持を述べるなら、私もイザヤとその言葉に対して、ニーフ

ァイと同じように喜びを感じている。しかしニーファイやイザヤの到達していた地点に達するためには、私も彼らの言葉を語り、彼らと同じ思いを抱き、彼らと同じ知識を持たなければならない。また彼らが信じ教えたことを、私も信じ教え、彼らと同じように生活しなければならない。

事実私の救いは(またあなたがたの救いも)、イザヤ書をニーファイと同じように深く正しく理解する能力があるか否かにかかっていると思われる。

ところでニーファイやイザヤの知っていたことが、私たちに知らされないということがあるだろうか。人を片寄り見ることをされない神は、すべての子らに同じような機会を与えられるのではないだろうか。彼らに啓示された事柄を私たちにも示すための原則と、その原則の要求する条件を神は宣言し、その条件を満たせば啓示を与えようと約束されたのではなかったか。

主エホバはイザヤに、「おとめがみごもって男の子を産む」と啓示された。(イザヤ7：14) その名前は、「神われらと共にいます」という意味である。この「子」は「大能の神、とこしえの父」となって、「そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく」続くのであった(イザヤ9：6,7)。また「自分を、とがの供え物」となし、「その墓は悪しき者と共に設けられる」のであった(イザヤ53：9,10)。イザヤは全人類に対する贖罪の約束をこう述べている。「あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる」(イザヤ26：19)。この神は終りの日にイスラエルを集め、「主にあがなわれた者は帰ってきて、その頭に、とこしえの喜びをいただき、歌うたいつつ、シオンに来る」(イザヤ35：10)。そして主の民は、主がシオンに帰られるのを、まのあたりに見るであろう。(イザヤ52：8) もし以上のことや他の数多くの輝かしい真理がイザヤやニーファイに知らされていたのなら、どうして私たちに知らされないのだろうか。このふたりの予言者が私たちの知らないことを知っていなければならない理由が何かあるのだろうか。主エホバは私たちの神でもあるのではなかろうか。

しかし、多くの人がイザヤ書を難解な書と考えていることは事実である。今日の諸教会は、イザヤの言葉をほとんど理解できないでいる。「イザヤが言った言葉の中には、私の民の多くの者に解りにくいことが少くない」(IIニーファイ25：1)とニーファイは言っている。この真実の教会の中にも、聖霊の賜によって啓発されているはずであるのに、モルモン経のイザヤの引用の部分をとばして読む者がいる。このような人はイザヤの言葉を封じられた書物の言葉のように見なしているのである。そして事実、彼らにとっては封じられた言葉なのである。もし多くの人が考えているように、イザヤ書が最も難解な書物のひとつに数えられるとするなら、同時に彼の言葉は私たちが精通し、熟慮すべき最も重要なものと考えなければならない。一部の末日聖徒は、イザヤの手になる予言的な言葉の封印を解き、その意味を一べつしようと試みているが、この貴重な宝に関する限り、聖徒の間においてもまだかすかなろうそくの光しかともっていないようである。

しかし聖見者イザヤの見た示現は、枡の下に隠しておく必要はない。イザヤの予言の言葉は、すべての教会員の心に明るい光をともすものである。もし人が救いの計画と、末日のイスラエルに働きかける主のみ手についてよく理解し、知識を得たいと心から願うなら—この態度はイザヤの言葉を熱心に調べよという主の戒め(IIIニーファイ23：1)に沿うものである——私はその人々に、ひとつの鍵を差し上げたい。その鍵を用いれば、キリストのその律法を証するこの証人の筆からほと走り出る光と知識の宝庫の扉を開けることができるのである。いろいろな意味でイザヤはイスラエルの最も偉大な予言者であった。ではイザヤを理解するための10の鍵を掲げよう。

1．救いの計画について詳細な知識を得、時の初めから今日に至るまで神が地上の人の子らにどのように働きかけてこられたかを知る

イザヤ書は他の書、例えばモルモン経のニーファイ第二書やモロナイ書のように、救いの教義を詳しく説明した書ではない。イザヤ書はすでに知識を得ている人々、中でも、イエスが主であってその贖いの血によって救いがもたらされることと、天父の王国に受け継ぎを得るには、信仰、悔改め、バプテスマ、聖霊の賜、そして義にかなった業が必要であることを知っている人々に向けて書かれたものである。一例をあげるなら、イザヤ書14章に出てくるルシフェルとその軍勢が肉体を得ることなく地に投げ落とされる話を理解するには、前世のことと天上の戦いの知識を前もって得ていなくてはならない。

2．主の永遠の計画の中におけるイスラエルの位置と行く末を知る

イザヤは選民イスラエルをこよなく愛し、彼の関心も選民の上に集中していた。彼は末日にヤコブの子孫が勝利をおさめ、栄光を得ることを詳細にわたって予言し、多くの

ページを費やしている。彼は特に回復について多くを語った予言者である。

この地が始まって以来すべての聖い予言者が予言したように、主の計画は万物の更新を必要としていた。この万物の更新とは、これまでのいずれかの時代の人々が所有していたすべての真理、教義、力、神権、賜、恵み、奇跡、儀式、力強い業が再び現われることである。アダムが享受した福音は、偉大な福千年の時代にアダムの子らの心に宿るであろう。主が選び、愛された民イスラエルは、再び王国を所有し、再び受け継ぎの地に住むであろう。そして地球も楽園の状態に戻り、エノクの市の平安と完全な状態が千年間地上に見られるであろう。

イザヤが書いたのはこういった事柄である。数多くいる古代の予言者の中でも、イザヤは、私たちに回復のよきおとずれと福音の回復、そして永遠の誓約が再び確立されること、王国がイスラエルに回復されること、さらに主が勝利のうちに戻ってこられ、千年の間栄光のうちに統治されることを記録して残してくれた予言者である。

3．イザヤが記した主な教義について知る

イザヤが記した主な教義は7つに分類することができる。(1)末日にジョセフ・スミスを通して福音が回復されること、(2)末日にイスラエルが集合し、最後の勝利と栄光を得ること、(3)モルモン経がキリストの新しい証人として登場し、教義上の理解を最終的には根底から改革すること、(4)末日における国々の背教的な状態、(5)主の最初の来臨に関する予言、(6)キリストの再臨と福千年の統治、(7)イザヤ在世当時の歴史上の出来事と当時にかかわる予言。

この7つの中でも、回復の日と、過去、現在、未来のイスラエルの集合が特に強調されている。

教会員の間には、怠惰な研究態度と狭い視野のために、福音の回復はすでに過去のものとなったと見る傾向がある。私たちは、イスラエルの集合は今も進行中であるとはいえ、その大部分はすでに終了したと考えがちである。御父の王国で完全な祝福を得るために必要な教義と神権と鍵を所有しているという点で、私たちが永遠の福音を完全な姿で持っているのは事実である。またイスラエルの残りの者が集められ、エフライムとマナセ（そして他の部族）のごく一部が教会に加入し、贖い主を再び知るに至ったことも確かである。

しかし、アダム、エノク、ノア、アブラハムに知られていた数々の真理の回復は、まだ始まったばかりである。モルモン経の封じられた部分もまだこれから翻訳されなければならない。すべてのことが新たに啓示されるのは、主が来臨されるまで待たなければならない。回復の時代の最盛期はまだ先なのである。そしてイスラエルについて言えば、彼らに対する約束が実現するのは、福千年に入ってからのことである。「国と主権と全天下の国々の権威」とが「いと高き者の聖徒たる民に与えられる」（ダニエル 7：27）輝かしい日はまだ先のことである。私たちは今その端緒を開こうとしている。しかし、私たちに示されようとしている。理解を越えた栄光と驚くべき事柄は、なお将来に待たなければならない。回復の予言者イザヤが語ったことの多くは、まだこれから成就するのである。

イザヤはメシヤの来臨を予告した予言者として広く知られている。それは彼が主の最初の来臨を豊富に、美しくかつ完全な言葉で予言しているからである。これは正にその通りである。霊感された言葉が今日まで伝えられている旧世界の予言者の中で、この点に関して、イザヤに匹敵する人物はいない。このメシヤの最初の来臨は、すでに過去の事柄である。従って霊的な洞察力に欠ける人でも、主の誕生、伝道、死に関してイザヤの予言が成就したことを知ることができる。

しかし私たちが本当にイザヤの書き残したものを理解することができれば、彼が実際に回復の予言者であって、ヤコブの子孫の力強い聖見者であるという明白な事実を、いくら強調しても強調しすぎるということはないであろう。イザヤは私たちの時代を先見し、霊的に弱く、落胆している当時のイスラエル人を力づけ、子孫に約束された栄光と勝利を保証したのであった。彼は末日にイスラエルの子孫が主に立ち帰り、真理と正義のうちに主に仕えることを知っていた。

4．モルモン経を参考にする

イザヤ書は、66章1,292節から成っている。彼の書き残したものは、聖書よりも真ちゅう版に完全な姿で保存されていた。ニーファイ人の予言者たちは、この聖書から414節引用し、少なくとも他の34節に注釈を加えている。（同じ節が2度にわたって引用されたり、注釈を加えられたりしている所が、5，6ヵ所ある。） 言い換えれば、イザヤ書の3分の1（正確には32パーセント）がモルモン経に引用され、それ以外に約3パーセントに注釈が加えられているということである。

ここで次の事実に注意を払い、その意義を考えていただ

きたい。それは、モルモン経の予言者たちが自分の用いた引用部分に解釈を加えているということである。その結果、この末日の聖典は、この旧約の予言の書を証する証書となり、そこに含まれた真理を明らかにするものとなったのである。モルモン経はイザヤ書の世界で最も優れた注解書である。

人は大胆な宣言だと思うかも知れないが、神がニーファイ人の証人を通して啓示されたことをまず学び、信じないかぎり、この時代の人は誰ひとりイザヤの書いたものを理解することはできないと断言したい。イザヤ書について数多くの真理がこの聖典に記されている。主御自身このモルモン経について「汝の主、汝の神の生きたもうが如く真実なり」(教義と聖約17：6)と確認しておられる。パウロが言ったように、神は「ご自分より上のものがないので、ご自分をさして誓われるのである(ヘブル6：13)。主は、モルモン経が、従ってその中に記録されているイザヤの言葉が、御自身のみこころであり、声であると、御自身の名前によって宣言しておられる。そのことから神の聖徒は、イザヤ書が複数の著者によって書かれたとする数々の学説は、例によって教会内外で知者を自称する人々が自信をもって提出している移り変りの激しい学説のひとつにすぎないことを知るのである。

5．末日の啓示を使う

主はこの時代に、直接の啓示によってイザヤの言葉を解釈し、承認し、明らかにし、また強調された。あの聖なる使いモロナイは、1823年9月21日にジョセフ・スミスを訪れたとき、「イザヤ書第11章を引用してこの予言がまさに成就しようとしている」(ジョセフ・スミス2：40)と言った。教義と聖約第113章には、イザヤ書11章と52章の数

章　内容

1　古代イスラエルにおける背教と反抗。悔改めを呼びかける。回復の約束とそれに続く悪人の滅亡の予告。
2-14　ニーファイ、IIニーファイ12－24に引用。全般的な解釈がIIニーファイ11, 19, 25, 26章に出ている。
2　IIニーファイ12章。末日にイスラエルが神殿に集合すること。末日におけるイスラエルの状態。福千年の状態とキリストの再臨。ミカ4，5。IIIニーファイ20, 21。
3　IIニーファイ13。散乱し背信した再臨前のイスラエルの状態。
4　IIニーファイ14。福千年。
5　IIニーファイ15。イスラエルの散乱と背教。イスラエルの悲惨な状態。回復と集合。
6　IIニーファイ16章。イザヤ、示現を見、召しを受ける。9，10節はメシヤに関連したもの。
7　IIニーファイ17。10－16節を除く節はユダ王国とその近辺の歴史。上記7節はメシヤに関連したもの。IIニーファイ11。
8　IIニーファイ18。ユダ王国近辺の戦争と歴史。真実の宗教を見定めるための勧告。13－17節はメシヤに関連したもの。
9-10　IIニーファイ19－20。パレスチナおよび近辺の歴史。不義のイスラエルがアッシリヤによって滅ぼされる記述は、再臨のときにすべての邪悪な国民が滅ぼされることを象徴している。9：1－7はメシヤに関連したもの。
11　IIニーファイ21章。回復。イスラエルの集合。福千年。ジョセフ・スミスの著2：40。教義と聖約101：26、113：1－6。1－5節はメシヤに関連したもので、再臨にも適用される。IIニーファイ30：9－15。
12　IIニーファイ22。福千年。
13　IIニーファイ23。再臨を象徴するバビロンの滅亡。教義と聖約29, 45。
14　IIニーファイ24。福千年におけるイスラエルの集合。天上の戦いに敗れ落ちたルシフェル。再臨に先立つ滅び。
15-17　パレスチナ地方の予言と歴史。回復の時代にイスラエルに敵対する者の最期。16：4，5はメシヤに関連したもの。
18　回復。イスラエルの集合。アメリカから宣教師が派遣されること。
19　近隣諸国に起こること。回復の時代におけるエジプトの救い。
20　近隣諸国に起こること。
21-22　近隣諸国に起こること。しかし再臨を象徴している。22：21－25はメシヤに関連したもの。
23　近隣の町、民に対する宣告。
24　末日の背教と再臨。教義と聖約1。
25　再臨。8節はメシヤに関連したもの。
26　再臨。復活。福千年。
27　福千年におけるイスラエルの勝利。
28　再臨に先立つ滅び。16節はメシヤに関連したもの。

節の啓示された解釈が記されている。また101章はこの古代の予言者の書第65章を理解するための鍵を含んでおり、第133章に記された主の言葉から同じく第35，51，63，64各章の理解が開けるのである。教義と聖約の脚注が示すように、末日の啓示がイザヤの言葉を引用、注釈、解釈している所が100ヵ所前後ある。このように教義と聖約には、約2500年前にイザヤに働きかけた聖きみたまの感化がそのまま伝えられているのである。

またジョセフ・スミスや、この神権時代におけるその他の霊感された教師の説教には、この偉大な聖見者の言葉に言及したり、説明したりしているものが数多くある。予言者の書のある節の中に、いつ、どこで、何について書かれたものであるかを明らかにする予言的な宣言がひとつでもあれば、その章節全体、あるいは関連ある章節の本当の意味がよく理解できることがままある。

啓示を理解するには確かに啓示が必要である。古代に真理を啓示した主エホバが、今日同じ永遠の真理を啓示し、古代の言葉と今日の言葉を照合されることは、きわめて自然なことである。主がそうされるのは、私たちがあらゆる時代を通じて語られた主の言葉を知って、祝福を得るためである。

6．新約聖書がイザヤ書をどのように解釈しているかを知る

イザヤは予言者が予言者と仰ぐ人物である。彼の言葉は、聖典の著者となった人々の心の中に生きており、新約聖書で少なくとも57回引用されている。パウロはイザヤの言葉によく言及し、数多くの書簡の中で20回ほど引用している。ペテロはイザヤの言葉を権威あるものとして7回引用している。またマタイも7回、マルコ、ルカは福音書で5回引

章　内容

29　IIニーファイ26：14－20，27。ニーファイ人。最後の日。背教。モルモン経。回復。このモルモン経について述べた部分は難解な章が霊感によって解釈された典型的な例である。
30　反抗的で世俗の欲にふけっているイスラエルが回復の日に救われること。背教。回復。それに伴う祝福。再臨。
31　この世と再臨。
32　回復のときまで続くイスラエルの背教。1－4節はメシヤに関連したもの。
33　背教に続く回復。
34　再臨とそれに伴う荒廃。教義と聖約1,133。
35　回復。集合。再降臨。教義と聖約133。
36-39　霊感によって美しく描かれたユダ、アッシリヤ、バビロンの歴史。
40　再臨。1－11節はメシヤに関連したもの。
41　神、古代のイスラエルと近代のイスラエルに議論し、回復の時代について語られる。27節はメシヤに関連したもの。
42　1－8，16節はメシヤに関連したもの。他の節は、神への賛美と、イスラエルの災難についての嘆き。
43　回復と集合。
44　回復と集合。
45　イスラエルは集められ、救われる。救いはキリストによること。20－25節はメシヤに関連したもの。
46　偶像対真の神。この対決は古代にも近代にも見られる。
47　今日の世界の象徴であるバビロン。
48-49　Iニーファイ20，21。イスラエルの散乱と集合。Iニーファイ22，IIニーファイ6。
50-51　IIニーファイ7，8。散乱、集合、回復、再臨。IIニーファイ9：1－3，10章。50：5，6はメシヤに関連したもの。
52　回復と集合。モーサヤ12：20－25，15：13－18，IIIニーファイ16，20，21、モロナイ10：30，31、教義と聖約113：7－10。13－15節はメシヤに関連したもの。
53　モーサヤ14。これは旧約聖書中メシヤの出現を予言した部分でも恐らく最も重要なものであろう。モーサヤ15，16。
54　回復と集合。福千年。IIIニーファイ22，23：1－6，14章。
55-62　背教。回復。集合。末日のシオンの栄光。61：1－3はメシヤに関連したもの。
63-64　再臨。教義と聖約133。
65　イスラエルと末日における誤った宗教家。福千年。教義と聖約101：22－38。
66　回復と再臨。

聖見者、回復の予言者、メシヤの降臨を予告した予言者イザヤについて説明してきたが、あとはただふたつのことを加えれば十分である。

1．聖典を理解し、救いの教義について深い洞察を得ても、それが人の生活を変え、完成される方向に向かわせるものでなければ、何の価値もない。知っている人の心の中に生きていなければならないのである。

2．イザヤの書いたことは真理である。イザヤは当時神の代弁者であった。彼が私たちの時代に見られると約束した栄光と驚くべき事柄は必ず実現するであろう。そしてもし私たちが真実かつ忠実であれば、生存中であろうと死後であろうとその事柄に参与するに違いない。これが私の証である。

用し、使徒行伝、ヨハネの福音書、黙示録にも各4回引用されている。以上の引用の一部は重複しており、一部はメシヤの来臨の予言であり、そのすべてがイザヤ書本文の啓示された意味を確認している。

7．イザヤ書を旧約聖書の前後関係から学ぶ

旧約聖書の他の予言者も、イザヤが述べたと同じ教義を説き、同じ望みをイスラエルに与えている。イザヤの言った意味を十分理解するためには、彼と相前後して活躍した旧約の予言者が同じような状況にあって同じ主題について何と言っているかを知ることが大切である。例えば、イザヤ書2：2－4はミカ書4：1－3に引用されている。イザヤは、すべての国民が、末日に集合したイスラエルによって建てられた神殿に流れ込んでくる様を、上記の有名な句で予言したあと、この集合に続いて起こる福千年のある出来事を描写している。ミカは大体において同じことを語っているが、福千年に起こる別の出来事を列挙していて、私たちの理解を広めてくれる。復活された主は、ニーファイ第三書第20，21章を見ればわかるように、ミカ書第4，5章を引用されているので、私たちはこのことについて確信を得ることができる。

8．イザヤの時代におけるユダヤ人の予言のしかたを知る

ニーファイ人の多くがイザヤの言葉を理解できなかった理由のひとつは、彼らが「ユダヤ人の予言のしかた」（IIニーファイ25：1）を知らなかったことであった。同じことが今日のいわゆるすべてのキリスト教徒についても言えるし、多くの末日聖徒についても言える。

ニーファイは、わかりやすい簡単な言葉で予言する方法を選んでいる。しかし、彼の郷里のヘブル人の予言者たちにとっては、必ずしもそうなることが賢明な方法ではなかった。民が邪悪なため、イザヤや他の予言者は、比ゆ的表現や、型、象徴を使って語ることがよくあった。彼らが言おうとすることは、事実上たとえ話の中に隠されていたのである。（IIニーファイ25：1－8）。

例えば、処女降誕の予言は、地方の史実を歌う吟唱の中に埋没し、霊的に暗い者にとっては約700年後に肉体に宿った主エホバの誕生とは何の関係もない、何か過去の未知の出来事と解されたのであった（イザヤ第7章）。同様に、末日の背教とキリストの再臨を扱った数多くの章は、古代の諸国と関連づけて書かれている。しかしこの諸国の滅亡は、主の大いなる恐るべき日が最後に来たときに、すべての諸国にふりかかる滅亡の象徴であり、型、影なのである。第13，14章はその典型的な例である。私たちがこの書き方を知り、モルモン経に出ている解釈の鍵を使えば、また末日の啓示を活用すれば、イザヤの言葉は私たちの眼前に開けてくるであろう。

9．予言のみたまを待つ

最後にいかなる聖句であろうと例外なく、聖句を理解するためには、その真理を述べた人が受けた同じ予言のみたまを持たなければならない。これ以外に方法はない。聖典は聖霊の力によって神から与えられるのである。人が創り出すものではない。聖典の意味するところは、聖霊が意図した意味なのである。聖句を解釈するには、聖きみたまの力によって啓発されなければならない（IIペテロ1：20，21）。予言者を理解するには予言者が必要である。すべての忠実な教会員は、「イエスのあかし」すなわち「予言の霊」（黙示19：10）を持たなければならない。ニーファイはこう言っている。「イザヤの言葉は、……およそ『予言のみたま』に満たされる人々には明瞭である。」（IIニーファイ25：4）主のみこころを知ることに関する限り、これがあらゆる事柄の本質をなし、すべての論争にとどめをさすものである。

10．誠実な態度で研究に没頭する

節ごとに、ひとつの教えごとに、段落、章ごとに精読し、熟慮し、祈る。イザヤが自問している通りである。「彼はだれに知識を教えようとするのか。だれにおとずれを説きあかそうとするのか。」そしてイザヤはこう答えている。「乳をやめ、乳ぶさを離れた者に……それは教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則。ここにも少し、そこにも少し教えるのだ。」（イザヤ28：9，10）

イザヤはイエスのことを証したためふたつに割き殺されたと言い伝えられているが、ここで彼が書いた全66章を概観し、さらに詳細な分析を加えるための手引きとしたい。

◇　◇

「イザヤの言葉は、まことに偉大なる
価値あり」とニーファイは書いている。
多くの人がイザヤの予言を
理解できないでいるが、イザヤの「予言の
言葉は明るく光輝を放っている。」

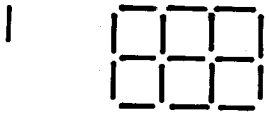
◇　◇

おもちゃばこ

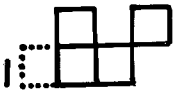
なにがあるのかな

ロバータ・L・フェアラル

いたずらねこちゃんのおかげで、けいとがこんなにこんがらがってしまいました。なにがかくれているのか、さがしてみましょう。



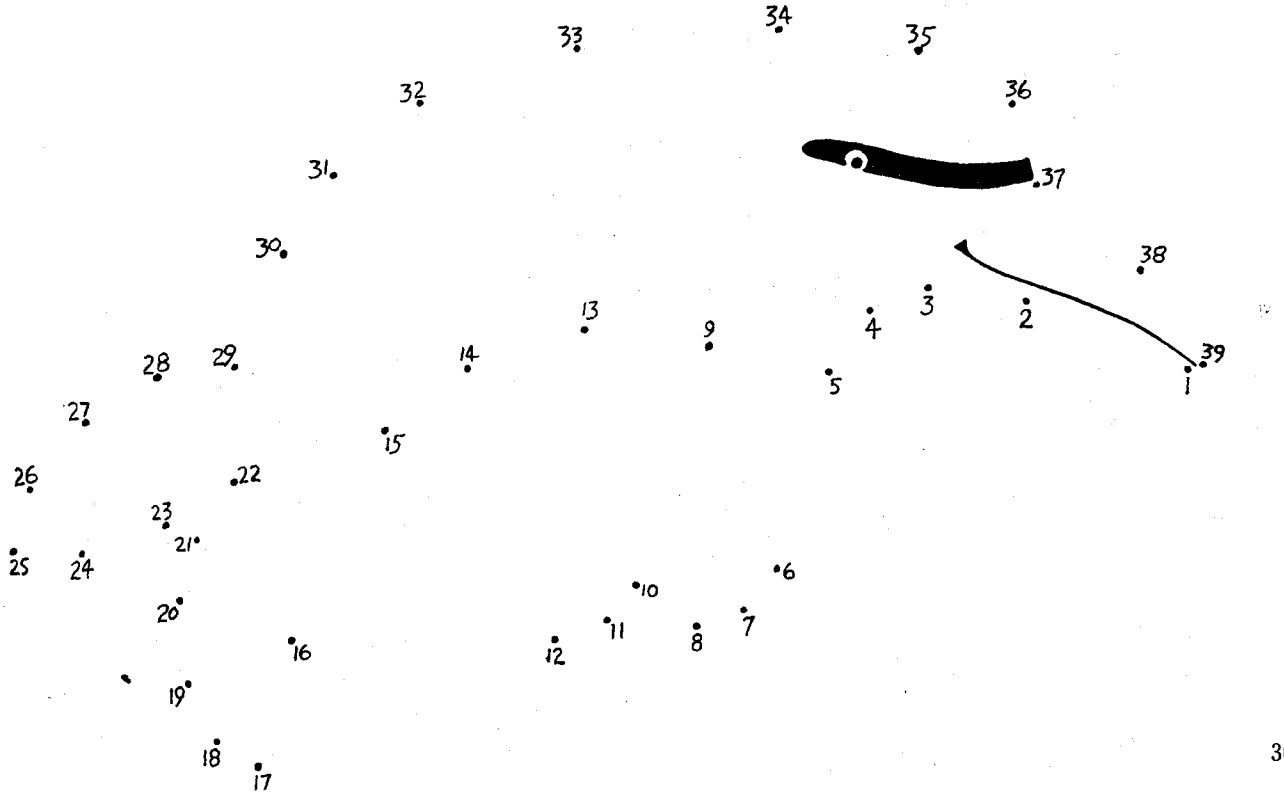
17本のぼうで、6つの正方形ができています。ぼうを3本うごかして、正方形を5つにしてください。さあ、よーくかんがえて、はじめ！



てんをむすんでみましょう。

キャロル・コーナー

どうけものの、うみのどうぶつができますよ。



とみこちゃんの
まほうのペット

おはなし：ポール・レマン
え　：リチャード・ハル

とみこちゃんのお友だちは、みんなはしゃいでいました。「カキだよ」「ほら、ヒトデ」「クラゲを見つけたよ」早くしなくちゃ、そう思うと、とみこちゃんはむねがドキドキしました。ひきしおのあいだに、なにかをつかまえないと、海べのかんさつクラブに、はいれないのです。「ハマグリを見つけたよ」と太郎くんが大きな声でいいました。するとさとう先生が「太郎くんが4ばんめだ」といいました。

とみこちゃんは思いました。「まだだいじょうぶだわ。」けんきゅうじょのあとをりようしたクラブのたてものはせまいので、今年は10人しかはいれないのです。

そうだ、大きな岩のかげには、きっとなにかがいるわ。とみこちゃんはごつごつ岩や、つるつるすべるまるい石の上を歩きました。あっ！とみこちゃんは、ぬらぬらした海草の上にころんでしまいました。ポチャンと小さな水たまりに水がはねました。

そのとき、さとう先生が、ふみこさんの名前をよびました。ふみこさんが5ばんめです。とみこちゃんはうずをまく水の中に手を入れました。「なにか見つけなくちゃ。クラブにはいりたいんですもの。」とみこちゃんはしにものぐるいでした。

よいしょ、と大きな岩をどけてみました。でも、岩のうらがわは、ぬらぬらしているだけで、なにもいませんでした。とみこちゃんは、岩をもとにもどそうとしました。するとどうでしょう。長い、ぬらぬらした黒いへんなものがいたのです。

でこぼこで、いぼだらけで、ちょうどやわらかいソーセージのようでした。はしっこには、あながあいていて、そこから水とすなをすいこむのです。見ていると、それは小さなカニまですいこんでしまいました。「わあっ」　とみこちゃんは、びっくりしました。

そこへ大きなカニがおよいできました。とみこちゃんは、大きな岩の上によじのぼりました。カニは、ハサミをふり立てて、そのへんなものにかかっていきました。

するととつぜん、そのへんなものは、ねちゃねちゃしたものをあなからふき出しました。とみこちゃんはびっくりしました。ねちゃねちゃしたものが、とみこちゃんめがけて、とんでくるかと思ったのです。

とみこちゃんは、目をまるくして水たまりの中をのぞきこみました。

そのへんなものは、また水やすなをすいこんでいます。でも、はんたいがわには、きれいなべとべとする花たばのようなものがついていて、小さな赤いはねのようなものがゆらゆらしています。小さな海の生物をつかまえるのです。そのはねのようなものは出たり、ひっこんだりして食物をつかまえてはそれをのみこみます。

「もし、あれが口だったら、かみつくかもしれないな」と、とみこちゃんは思いました。でもゆうきを出してちかづきました。ぬらぬらしたおなかの下に手を入れてみると、足のようなものがありました。「きゅうばんみたい。これでつるつるすべる岩の上を歩くんだわ。」

とみこちゃんは、そっとつかんでみました。でも、うごきませんでした。2ばんめの足、それから3ばんめの足をさわってみました。「あれっ、こんなところにも、ふたつある」とみこちゃんはさけびました。「あなたはなに？　キュウリみたいね。」

「それは海のキュウリだよ。ナマコさ。」太郎くんがいいました。「とってごらん。かみついたりはしないよ。」「10ばん、とみこちゃんナマコを見つけました。これでしめきり！」と、さとう先生が、みんなにいいました。「やった、クラブにはいれるんだわ。」とみこちゃんはうれししそうにいいました。

太郎くんが、とみこちゃんのところへハマグリをもってやってきました。「とりかえよう、とりかえようよ。」太郎くんは、やわらかいナマコをもち上げていいました。

「うちのお父さん、ナマコがすきなんだよ。もっていってやりたいんだ。とりかえてくれないかなあ。」

「だめ、わたしのよ。食べちゃだめ！」とみこちゃんは、いいはりました。「でも—、お父さんのためだもの。」太郎くんは、ナマコをぎゅっとつかみました。

するととつぜん、ナマコはかたくなり、中みは水のようになって、外に出てしまいました。そういえば、お父さんは、ナマコをつかんだり、いじめたり、おどろかせたりしてはいけないといっていました。

「いじめちゃいやよ。ブワブワになっちゃったじゃないの。」とみこちゃんはいいました。

太郎くんはカワだけになったナマコをすくいあげてあやまりました。「ごめんね。ほんとに……。そうだ、お父さんにおそわったおまじないを教えてあげるよ。」

太郎くんは、とみこちゃんに、こっそりと話しました。とみこちゃんはびっくりしました。そんなおまじないなんてしんじられませんでした。

「ほんとだよ。お父さんが、いったんだもの。」太郎くんはいいました。そして、太郎くんは、ナマコのカワを大きな岩のそばのすなの中にうめました。

とみこちゃんは、びっくりしてだまって見ていました。「いつ、もとどおりになるの。」

「うーん、このつぎのひきしおのときだね。」太郎くんはやくそくしました。

とみこちゃんは、ひきしおの日まで毎日、海を見に行きました。

そして、むねをわくわくさせながら大きな岩の下におりて、あちこちを見てまわりました。ぬらぬらしたところをさわってもみました。でもナマコはいませんでした。おまじないなんて、うそだわ、ととみこちゃんは思いました。

とみこちゃんは、太郎くんがナマコのカワをうめたところに行きました。そして、すなの山をなでてみました。すると、指がなにかにさわりました。すなの上に、小さなくだが出ていたのです。そして、それは水とすなをすいこんでいました。

とみこちゃんはうれしくなって、指ですなの中をさぐってみました。あるある、小さなはねのようなものがありました。

とみこちゃんは、そっとすなの山をほりました。そして、ごろんとして、ぬらぬらしてやわらかいソーセージのようなナマコの下に手を入れました。とみこちゃんはうれしくて、むねをどきどきさせながら、ナマコをそっともちあげました。

「おまじないは、ほんとうだったわ。ナマコって、まほうみたい。ちゃんと、もとどおりになっちゃうんですもの。」

とみこちゃんは、手のひらにナマコをのせて、クラブのたてものに走っていきました。「見てちょうだい。ナマコがもとどおりになったのよ。まほうみたいでしょ。」

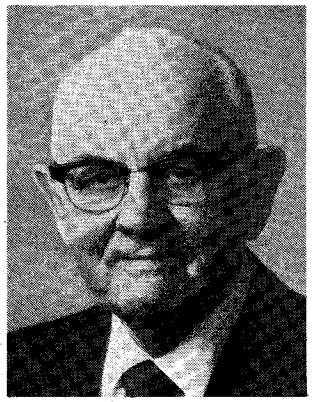
ナマコは中みをはき出してしまっても、また新しく自分の中みができるのです。さとう先生は、みんなにそうせつめいしました。

「もうわかったでしょう。これはまほうではないのです。でも、ふしぎなことですね。」

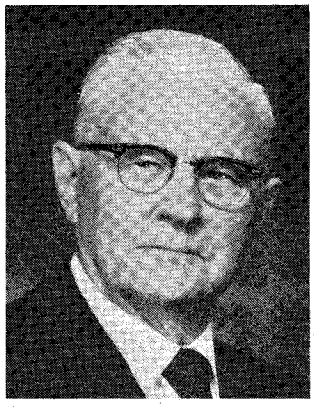
みんなは、こっくりとうなずきました。でも、とみこちゃんはいいました。「わたし、やっぱりナマコはまほうだと思うわ。」

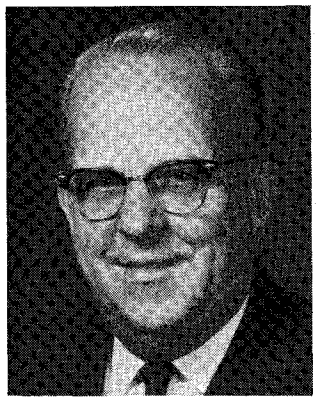
第144回半期総大会の話

小さなお友だちへ


スペンサー・W・キンボール大管長

A・セオドア・タトル長老


デルバート・L・ステイプレー長老


フランクリン・D・リチャーズ長老

スペンサー・W・キンボール大管長

けんちく資金をおさめ、赤十字にきふをし、土よう日の朝、未亡人の家のペンキぬりをして、長老定員会をたすけているならば、子どもたちにも、そのことを教えなさい。そして、子どもたちにも実行できるならば、実行しようという決意をさせなさい。家族は全員、バプテスマ、かくにん、せいにんのぎしきに、さんかすることができます。また、野きゅうのチームにはいっている子供のおうえんに行くことができます。家庭の夕べ、食事、祈りのときに、集まることもできます。また、家族いっしょに什分の一をはらうこともできるのです。そして、そのような教えやもはんによって、美しい原則を学ぶことができます。

A・セオドア・タトル長老

若いみなさん，みなさんがいつか、伝道に出ることについて、お話ししたいと思います。私も、むかしはみなさんのような少年でした。みなさんには、ずいぶんむかしのことのように、聞こえるかもしれませんが、私には、ついこのあいだのように思えます。私は、みなさんの生まれるずっと前に生まれたのです。私にも子供がありますからこれまで、若い人たちといっしょに、たくさんの経験をしてきました。

神の予言者は、今こそ私たちが出て行って、伝道をおし進めるときであると言われてましたが、そのときは今です。

私は、前に若い人と伝道について話したことがあります。彼は言いました。「ぼくは行きたくないんです。」私は言いました。「それがどうしたのでしょうか。私たちは、あなたを必要としているのですよ。」

たえず祈るようにしてください。朝夕、ひざまずいてください。主とともに、よい時間をすごしてください。こう語った若者のように。「教会の前をとおりかかると、私はいつも中に入ります。だから、私のひつぎがはこばれてきたとしても、主は『それはだれか』とは、おたずねにならないでしょう。」

フランクリン・D・リチャーズ長老

あるかんとくが、なん人かの若者を事務所によんで言いました。「ある実験をしたいのですが、てつだってくれませんか。ひとりの会員が家族の霊性に、どのくらい、えいきょうをあたえるか、たしかめたいのです。そこで、1ヵ月間、みなさんに自分の家の、平和の使者になってほしいのです。このことは家族には言わないでください。しんちょうに、親切に、よく考えて、やってみてください。もはんを示してください。家族の中で、けんかや言いあらそいをする人がいたら、愛や、一致や、幸福というようなかんきょうをきずいて、そのような悪いことをなくすことができます。」

これが、若者たちにあたえられたチャレンジでした。若者たちは、みごとにこのチャレンジをはたしました。彼らは、かんとくに、このようにほうこくしました。

ある若者はこう言いました。「家庭に、こんなにえいきょうをあたえることができるなんて、考えてもいませんでした。先月は、ほんとにかわったんですよ。家族がやっていたけんかや、言いあらそいが、そんなにぼくやぼくのたいどのせいだったなんて。」

ある少女はこう言いました。「私たちは、ごくふつうの家族でした。わがままを通そうとして、毎日、小さないさかいをしていました。でも、私が兄弟姉妹といっしょに働きはじめると、そういうことは少なくなって、家庭にすばらしいふんいきがうまれたのです。自分の家を平和なふんいきでつつもうと思ったら、ほんとにこうしなければならないんですね。」

デルバート・L・ステイプレー長老

小さな子どものうちから、よいしゅうかんを身につけていれば、それが、しょうらいの生活のもといとなり、しょうらいの生活をささえます。

ほしまつり

マーガレット・ナイト・ホルツ

アンは日本に来てから、まだ1年にしかなりません。きょうは、アンにとって、はじめてのたなばたです。アンはうれしくてたまりません。まさなりくんの家によばれているのです。

アンが行くと、まさなりくんのお母さんが、げんかんの戸をガラガラとあけて、「いらっしゃいませ、アンちゃん」といいました。

アンは家の中に入る前に、ふみ石のところでくつをぬぎました。そしてスリッパをはいて、パタパタとろうかを歩きました。学校のお友だちがいっぱい来ていました。けいこちゃんも、まさなりくんも，たたみの上にすわって七色のおり紙でたなばたのかざりを作っています。

「いらっしゃい、おしえてあげましょう」とまさなりくんのお母さんがいいました。お母さんは、おり紙でカニを作っていました。

さいしょに、お母さんは、みんながよく知っているどうぶつの作りかたをおしえてくれました。みんなは赤い犬や、むらさき色のねこを作りました。そして、おもしろいかおをかきました。

けいこちゃんは、げんごろうを作りました。

「ねえ、ぞうができたよ」とじろうくんがいいました。

「わたし、ちょうちんを作ったのよ」とけいこちゃん。

みんなアンよりも、ずっと早く作ってしまいます。じろうくんは、アンの手のひらに、きれいな鳥をのせてくれました。「これは、おりづるっていうんだよ。つるっていうのは白くて、はねの先が少し赤い鳥なんだ。夏になると日本にやってくるのさ。つるは、長生きとこうふくの鳥なんだ」とじろうくんはいいました。

たたみの上は、おり紙でいっぱいになりました。おりづる、カメ、ふね、カエル、それから、ちょうちんもあります。そこへ、お母さんが竹をもってきました。みんなは、おり紙のふねやカエルを竹につけました。「まあ、ほんとにきれいだわ」とお母さん。

それから、お母さんは、おほしさまのいいつたえを話してくれました。

高い、高いお空の上に、かわいそうなおほしさまが、ふたつかがやいているの。ふたつのほしは、とてもあいしあっているのだけれど、あまの川があるので会えないの。でも、一年に一かい、こんやだけ、あまの川をわたって会うことができるのよ。」

くらくなったので、みんな外へ出ました。きれいなかざりをつけた竹を高くさし上げながら、みんなで「ほしまつり」のうたをうたいました。たなばたのかざりが、夜空にさらさらとゆれました。

(おりかた)

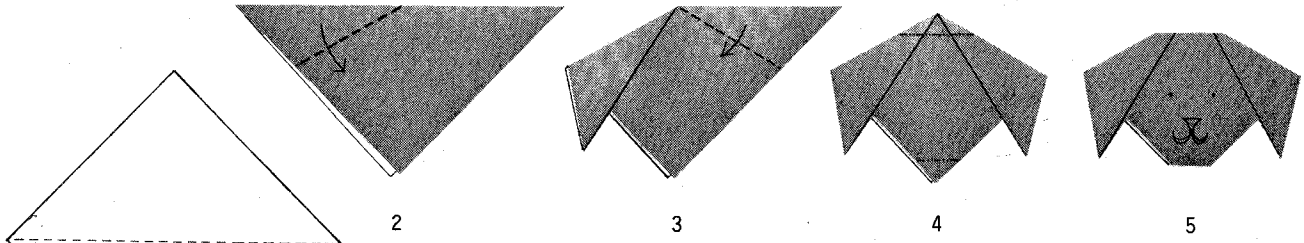
犬　1．まず、三かくにおります。
　　2．左はしを、図のようにおりさげます。
　　3．右はしを、図のようにおりさげます。
　　4．上と下を、図のようにうらにおります。
　　5．えんぴつで、かおをかきます。

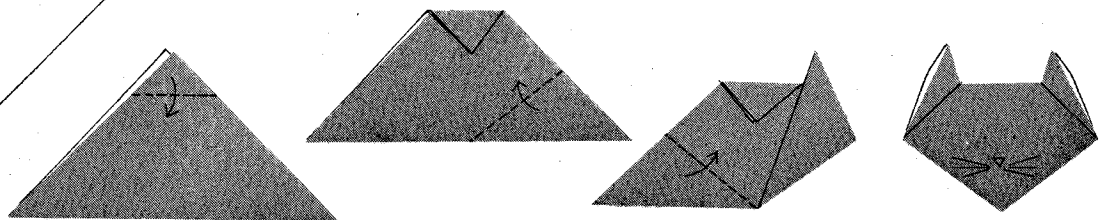
ねこ1．まず、三かくにおります。
　　2．上はしを、図のようにおりさげます。
　　3．右はしを、図のようにおりあげます。
　　4．左はしを、図のようにおりあげます。
　　5．うらがえしにして、かおをかきます。

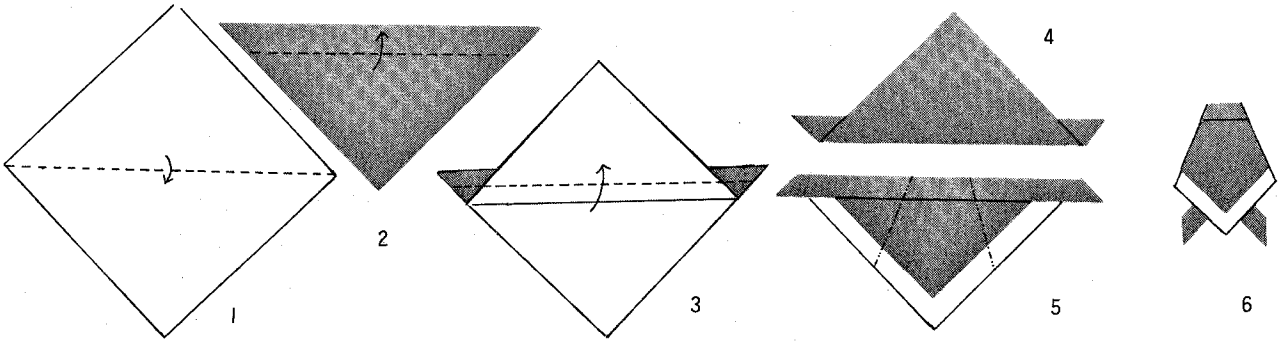
げんごろう
　　1．まず、三かくにおります。
　　2．上の一まいを、図のようにおりあげます。
　　3．てんせんから、やじるしのようにおりさげます。
　　4．そうすると、図のようになります。
　　5．うらがえしにして、両はしを図のようにおります。
　　6．できあがり

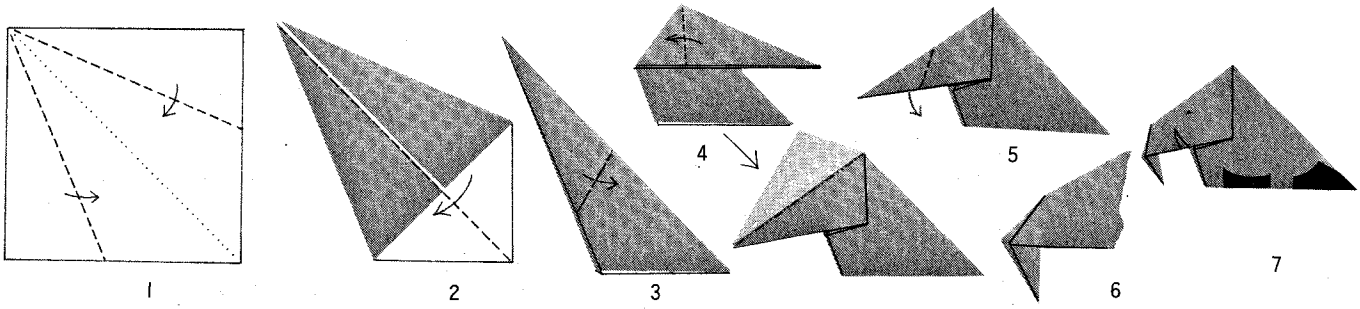
ぞう1．図のように、両はしをたいかくせんにあわせて、おります。
　　2．まん中から、ふたつにおります。
　　3．とがったほうを、図のようにおります。
　　4．まん中からひらきながら、図のようにおります。
　　5．てんせんから、うらがわにおります。
　　6．さきを、図のようにおりさげます。
　　7．あしやどうを切りぬき、目をかきます。

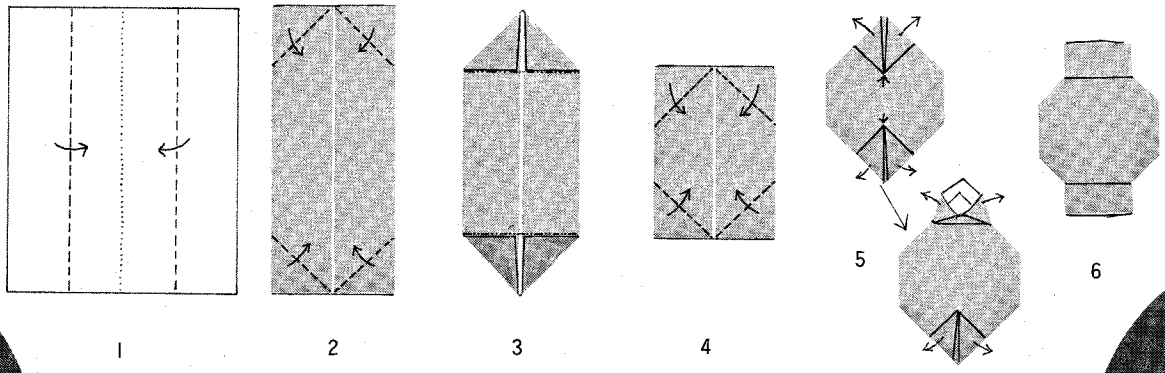
ちょうちん
　　1．両はしを、まん中のせんにあわせております。
　　2．4つのかどを、図のようにおります。
　　3．上と下の三かくになったところを、うらにおります。
　　4．もう一ど、4つのかどを、図のようにおり、うらがえしにします。
　　5．上と下の四かくのところを、図のようにおりひらきます。
　　6．ほら、できたでしょう。


1
2
3
4
5


1
2
3
4
5


1
2
3
4
5
6


1
2
3
4
5
6
7


1
2
3
4
5
6

質　問

旧約聖書全体を通じて、その実力や重要さからいって、イスラエルは主要国から問題にされるほどの国家だったのですか。それとも、実際は盛衰する地方の小勢力でしかなかったのでしょうか。当時、イスラエルに悩まされた大国はあったのですか。

解　答

ブリガム・ヤング大学古代聖書学教授
エリス・T・ラスムセン

◇　◇

ここで与えられている解答は、疑問解決の一助となるものであり、教会の教義として公式に宣言されているものではない。

◇　◇

イスラエルは非常に小さな国でしたが、ダビデやソロモンの時代（紀元前1000年から930年の頃）には隣国からすでに一目置かれるようになりました。アッスリヤの王シャルマネセル2世やセナケリブの記録によれば、イスラエルはその後も中東の列強支配者たちの関心の的となっていました。紀元前850年から700年までの1世紀半の間に、イスラエル征服の試みが何回も行なわれています。事実イスラエルを含む小国が連合して、カルカルの戦役（紀元前854年）ではアッスリヤの勢力拡大に歯止めをかけています。アッスリヤという大国が再び触手を動かすまで、その後10年もかかりました。

北のイスラエル10支族と南のユダ王国は、北のイスラエル王国が紀元前722年にアッスリヤのサルゴン2世によって征服され、その住民が討たれたときまで、時々アッスリヤに貢ぎを強要されていました。しかし、ユダ王国は、予言者イザヤと善王ヒゼキヤを通じて主に助けられ、アッスリヤ王セナケリブのエルサレム攻撃をみごと退けました。（列王下18：19参照）

ユダ王国に目をつけたその次の大国はバビロニアです。バビロニアがアッスリヤ軍を打ち破っていたときに（紀元前620－604年）、エジプトが帝国の一部を我がものにしようとユダ王国に進軍してきました。それに対してユダの王ヨシヤは抵抗しましたが、軍は散らされ、自分も殺されてしまいました。しかしユダにおけるエジプトの勢力は短命でした。エジプトのパロ・ネコはまもなくバビロニアに征服され、バビロニアは紀元前607年から587年の間に何回もユダを配下に置こうと試み、ついに平和的にユダを従属させ、貢ぎを取り立てるようになりました。ユダの指導者たちは次々国外に追放されました。そしてエゼキエルやダニエルはバビロニアで実際に予言活動に携わっています。

ユダに注目した次の国家はペルシャです。ペルシャ王クロスはバビロニアを征服した（紀元前539年）あと、捕虜となっていたユダヤ人をユダやエルサレムに帰すのがよいと考えました。それで、エズラやネヘミヤや、ハガイ、ゼカリヤといった予言者たちのもとで、再び小国家が建設されたのです。

マケドニアの大帝国建設者アレキサンダー大王は、ユダの神と人民を尊重し、ユダの国に大幅な自治権を与えました。しかしその帝国が分裂した後、セリューカス王朝の統治者とユダヤ人の間に大きな戦いがあり、マカベア戦争でそれが終結しました。（紀元前164－64、マカベア第一、第二書を参照のこと）

ユダは事実上の独立を勝ち取りました。今度は内乱がもとで、マカベア族の最後の後継者であるふたりの王子がローマに援助を求めました。そこでローマは自力で聖地を制圧しました。しかし力あるポンペイウスでさえも、エルサレムを包囲し突入するまで3ヵ月もかかり、とても手こずりました。（紀元前63年）

紀元前66年から70年にかけて、ローマは再度エルサレム支配をめざして包囲攻撃をかけ、ヴェスパシアヌスとティトゥスの指揮下にユダと戦いました。

また132年から135年には、ハドリアヌス帝がエルサレムを包囲しました。このときの戦いは偽のメシヤ　バル・コクバに対するものでした。こうしてエルサレムはまたも破壊され、ローマの町として再建され、改称されて、紀元635年までローマの支配下にありました。

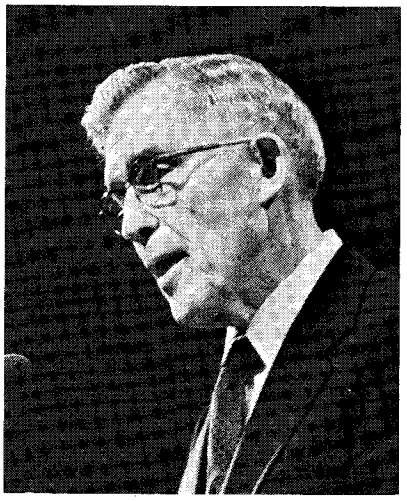
このように、イスラエルとイスラエルから分かれたユダはごく小さな国でしたが、何世紀にもわたって、中東の大国の注目を集め、その数ヵ国は征服に骨折ったことが明らかです。

また、現在、将来ともに強国がイスラエルやイスラエル国民に手を焼き、やがてはそこにメシヤによる義の統治が確立されることでしょう。

「しもべは聞きます」

世の初めから、主は地上の王国の大切な務めに汚れのない若者を召してこられた。

七十人最高評議員会会長
S・デルワース・ヤング



私は、おとなへの道を踏み出したばかりの少年たちに話をしたいと思う。

歴史を顧りみると、主なる神は永遠の目的のために立派な指導者を訓練しようとするとき、躊躇なしに少年たちを選んで、彼らを召し、油を注ぎ、備えをさせ、成長の暁には定められた務めに彼らを送り出してこられた。

私たちはだれでも、ヨセフについて、彼が奴隷となり、夢を釈き明かす予言の賜を受け、またポテパルの妻から大きな誘惑を受けたときに、いつの世にも変わらぬ若者の模範を示して「外にのがれ出た」（創世39：12）話を知っている。また、彼が自分の民を飢餓から救ったことも。

ヨセフが穴にうずくまって、兄たちの意地悪い顔を恐ろしげに見上げたときに、また自分を買おうという異国の商人たちの顔を見たときに、いったいどんな思いだっただろうかと私は時折考える。しかしその苛酷で悲惨な状況も、主に対する信頼によって良いものに変わった。そして従順によるその信頼は、後世において全人類に益することとなった。ヨセフに長子の特権が約束され、約束の地が与えられたのである。

さて、ここでキリスト生誕前千年の昔にかえって、古代イスラエルの地の少年サムエルが眠っている神殿の部屋に入ってみよう。サムエルを呼ぶ声は私たちに聞こえないだろうが、彼が起きてエリのところへ行き、自分を呼んだかどうかと尋ねている様子は見えるであろう。エリは何回もサムエルに尋ねられていぶかしく思っているが、やっとサムエルを呼んだ御方がだれであるかを悟った。3度目に起こされたエリは、このように言っている。「行って寝なさい。もしあなたを呼ばれたら、『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言いなさい。」（サムエル上3：9） あなた方も私も、キリストが来られる千年も前、すなわち主が教えや賞賛や叱責や認容をはっきりした

言葉で語られるということを皆が知っている時代にいることを、考えてみてほしい。もちろん、「でもサムエルは予言者に選ばれたのだ」と考えることであろう。

主が汚れのない少年を選んで、その少年が普通一般の人が「真理」とみなしている事柄を学ぶ前に、本当の真理を彼に教えられることを思うと、私の胸は高鳴る。主が予言者たちの心に、哲学者の思想ではなく、彼らに考えてほしいこと、言ってほしいことを植えつけられることは御承知であろう。イザヤに言われた言葉を思い出していただきたい。

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。」（イザヤ55：8）

サムエルの場合に、主は人の思いではなく主の思いを語られた。サムエルは主のみ声を聞いた。その日、サムエルが主のみ声を何度か聞いたあとで主のみ姿を見たことを知って、あなた方はさぞ驚いたことであろう。（サムエル上3：21参照）

もしサムエルが、聖所やエリという保護を持たずに主のみ声を聞いたと街頭で宣言したら、サムエルはいったいどうなっていただろうか。また、もしサムエルが見ず知らずの少年としてエリの家の戸を叩き、エリに伝えることがあると言ったら、エリはどう返答しただろうか。

サムエルが主の霊感により、エッサイのほかの息子を差し置いて、ダビデをイスラエルの王に召そうとしたとき、ダビデは父の羊を飼う一介の少年に過ぎなかった。そのくだりを読む人は、主がダビデを深く愛しておられたこと、彼を召したのは神であるということに何の疑いも持たない。

さて今、3人の主の僕を紹介したが、環境と方法こそ違え、いずれも主に選ばれ、召された少年である。この話をするのは、おとなになろうとしている少年たちがそれぞれに主から召されたことを、今一度思い起こすためである。少年たちは直接の啓示によって、主が神にましますこと、主ははっきりした姿を持つ実在の御方であること、理解できる言葉で話をして下さることを知った。また、主なる神が不変の御方であることをも、思い起こそうではないか。主は3,600年の昔も、今も、そして永遠に同じである。

ジョセフ・スミスは、主のみ言葉を聞いたとき、14歳の少年であった。主が人に話をされてから久しく、1,800年近くが過ぎて、状況は昔と違っていた。学者が啓示を読み、複写した際に、人を導く神のみたまによらず、理性によって解釈したのである。

そもそも古えの予言者の時代は、受けた啓示を羊皮紙に書き、それを巻き物にして保存していた。巻き物の複写は、筆写者が苦心して書き写す方法しかなかった。一字の間違いもなく筆写するのはほとんど不可能というものである。従って、筆写したものからまた筆写するというふうに1,400年近い時を重ねるにつれ、だんだんと間違いがふえていった。そうして多くの誤りが生じたことは容易に理解できる。

やがて印刷術が普及して書物が広くゆきわたるようになると、人々は、必然的に、誤りにも気づくこととなった。そして教会の慣習が本に書かれている原則とひどくかけ離れていることに驚くのである。彼らは決然として抗議した。従うのを拒否して命を捨てた者も多かった。以来次々と、主の教えに対してプロテスタントの解釈が生まれてきている。実際に今も、自分は召されたと思いたって新しい教会を創る人があり、それが認められているのである。

1819年の冬から翌年の春にかけて、ニューヨーク州パルマイラでも幾つかの宗派が活発な抗議の動きを示していた。各派の牧師はそれぞれに自派の解釈が正しいことを地域の住民に納得させようと努め、多くの人が彼らの言葉を受け入れた。

ジョセフ・スミスも救いの平安を見出したいと思ったが、どの教会が正しいのかわからなかった。彼は少年ながら、教義や儀式がこのように違っていては全部が正しいはずはないと考えていた。そうしているときに、ヤコブ書の中から、「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」（ヤコ

ブ1：5）という聖句を読んだのである。その言葉は、主のみ声がサムエルを動かしたように、ジョセフ・スミスを動かした。

これは読む人に安らぎを与えずにはおかない聖句である。多くの人はこの勧告に従い、知恵を求めた。そして信仰ある者は知恵を得てきた。だがジョセフの場合、霊感ははるかに強烈であった。彼は知恵のみならず知識をも受けることとなったのである。

この地上の歴史を考えてみると、偉大な出来事が起こるには必ずその時が定められていることがわかる。神の力により定められ、規定され、備えられた事柄は、引き延ばされることはないのである。例えば、イスラエルの民がエジプトを出たときのことを考えてみると、だれひとりとしてそれを止めることのできる者がいなかったことに気づく。それでもあえて阻止しようと試みた者たちは悲惨な目に遭っているのである。また時の絶頂には予言者の語った約束が成就し、驚くべき出来事が起こった。天使の訪れを受けたマリヤは、突然、神の御子の母になることを告げられ、またエリサベツは、この偉大でかつ高尚な出来事にあって自らの果たす役割を告げ知らされた。そしてこのことが初めて公にされるにあたって、天使は身分の低い羊飼いたちを訪れてそれを告げた。しかし彼らは、天のみ使いたちが神を賛美して歌うのを聞いただけであった。

そして1820年、時は巡ってきた。末日である。そのことは、すでに数々の予言者たちが言明していた。ジョセフは父が新たに切り開いた農場を、うねを巧みに跳び越えながら横切り、古びた垣を乗り越えて森へ入って行った。そして丘を登りながら人目につかないところを見つけると、その心の中にある思いを主に打ち明けたのである。

突如天より降った大いなる光は、神の属性に関して約1,800年の長きにわたり人々が抱いていた誤った考えを消散させるものであった。そこには全人類の天父なる神が筆舌に尽くし難い栄光に包まれて立ちたまい、またその傍らには、復活し栄光を受けたもうた主イエス・キリストが立っておられたのである。ジョセフは御二方がそれぞれ別の御方であることを目にし、さらに人がまさに神に似せて造られたことを知った。永遠の父なる神はこう語られた。「こはわが愛子なり、彼に聞け。」（ジョセフ・スミス2：17） ジョセフは耳を傾けた。

ジョセフに告げ知らされたことは、この地上に真の教会は全くなく、すべて堕落してしまっていること、また神に代わって語る権威を持つ者がいないためにすべて誤って導かれているということであった。その早春の日、彼は多くの大切な真理を知らされ、自らが、この地上における真の教会の回復の器となることを知ったのである。

ジョセフはその日の午後、家に帰ってから両親にその日受けた示現について語ったが、ここでもうひとつの奇跡が起きた。彼の父、母、それに兄弟姉妹までが彼の言葉を信じたのである。ところが驚いたことに、他の人々に話すと、彼らは信じないばかりか気が変になったのではないかとジョセフを馬鹿にした。これは一介の少年にとって耐え難い迫害である。主の道を求める方法について親切に教えてくれた牧師さえ、ジョセフに痛烈な皮肉を浴びせ、こきおろしたのであった。そしておとなになり、予言者としての資格を具えるようになる頃から、彼は常に悪口、あざけり、暴力と共にあった。しかしジョセフは、サムエルが主のみ声を聞いたと確信していたように、自分も御父と御子のみ姿を目にし、そのみ声を耳にしたことを常に自覚していたのである。

ジョセフは自分と同じ名をもつ古代の予言者ヨセフのように、自らの道を進んだ。主は彼を主の器として、道であり真理であり光である天の教義をお与えになった。それは天父なる神の住まいに帰る道を指し示すものであり、天父の息子、娘として、私たちが天父のもてるすべてのものを、永遠の生命に至るまで受け継がせてくれるものであった。

主はジョセフ・スミスを通して、ひとつの奇跡的な証拠を授けられた。それは偏見を持たずに研究するすべての人にとって確かなしるしとなるものである。その証拠とはイエス・キリストについて、またイエスの古代アメリカの人々への訪れについて記されたモルモン経と呼ばれる書物である。これは人が作った証拠ではない。主のものである。翻訳のもととなった金版の存在は、それを見た11名の人々によって証言された。彼らは今日すべての人々にその証をしている。またさらにその中の3名は、主のみ声がこの古代の記録は「神の賜と能力によって」翻訳されたものであると語りたもうたと証している。（モルモン経の三人の見証者の証言より）

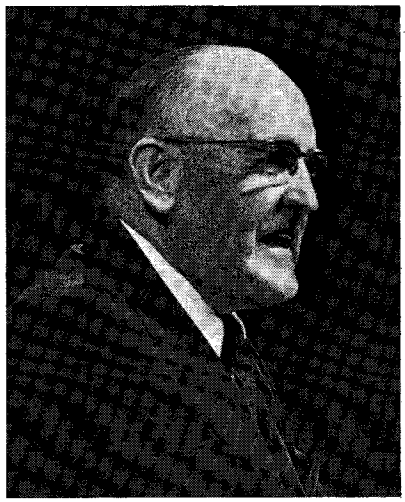
私たちは地上のすべての人々に、この証を試してみるようにお勧めしたい。モルモン経を手に入れ、真理を知りたいという望みを抱きながら読んでいただきたい。ひとりの予言者が語ったように、心の中に深く考えた後にそれが真実かどうかを主に尋ねるならば、主は「聖霊の力によってこの記録が確かなものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」 この試しを行なえば、あなたは近代の予言者ジョセフ・スミスが真実予言者であったことを知るであろう。そして聖霊の力によって真理を知ったあなたは、神の王国に入り、主イエス・キリストなるエホバの大いなる安息に入るまで、すなわち末日聖徒に加わるまでは安息を得ることがないのである。

この地上の王国の権威と権能はスペンサー・W・キンボール大管長の上に置かれている。私は厳粛な気持で証したい。ジョセフ・スミスは予言者であった。そして今、キンボール大管長は神の予言者である。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

八福の教え

まことの弟子は八福の教えで説かれた特質を具えている。

十二使徒評議員会補助
O・レスリー・ストーン



救い主はこの世で導きと恵みを施す業を始めた初期のころ、ガリラヤの海を見下ろす丘で、12人の弟子と熱心な大勢の群衆に山上の垂訓を与えられた。この垂訓の一部は「八福の教え」と言われ、現在も貴ばれている。(マタイ5：1—11参照)　この教えについて少し話したいと思う。

八福の教えは主の教えの真髄をなすものであり、主の精神と生き方がそこに見られる。主がこれを説かれた目的は、弟子たちに教えを授け、福音をよく理解させることであった。それは、キリストのまことの弟子はこれらの特質から成る性格を持たなければならないからである。

八福の教えの最初は、マタイ5：3に見られる。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。」

「こころが貧しい」とは、どういう意味であろうか。すなおで熱心に学ぼうとする謙遜さのことであろうか。自らを霊的に貧しいと考えている者は、主に自分の必要を満たして下さるように願いつつ主に近づく。主を信じる者は主の律法を学び、主に従うよう精励する。こうしてこれらの者は、主が約束しておられる大きな祝福にあずかる者となるのである。すなわち、救いと昇栄と、神のあらゆる賜の中で最大のものである永遠の生命を授かるのである。(教義と聖約14：7参照)

「悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。」(マタイ5：4)

悲しむ者は、その悲しみの中に神のみこころを見るとき、慰められるであろう。主は次のように言っておられる。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ11：28)

私たちが常に心に留めておかなければならないことがある。それは、永遠の行く末に備えるため、訓練の一部として主が私たちに数々の問題を与え、その解決を私たち自身に委ねておられるということである。

ある作家はこのように語っている。「あらゆる苦難と不幸が人生から取り去られたら、われわれはどのような人間になるだろうか。もしも苦難が人生から除かれたら、強く、気高く、高潔で、思いやりある人間に成長することは不可能であると思う。」

私たちは悲しい事態に直面しても心をいじけさせないようにしなければならない。信仰を保ち、祈りを通じて主に慰めを求めなければならない。私たちには祝福が約束されているからである。重荷を負う者は、信仰と自分の行ないによって、まことの福音の慰めを知るときに、幸せを得るであろう。

「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。」(マタイ5：5)

柔和はひとつの徳であり、これは人

に対しても神に対しても示される。柔和な人とは、やさしく、親切で、忍耐強く、寛大な人のことであり、決して誇らず、ごう慢でなく、うぬぼれない。「怒りをおそくする者は勇士にまさり」という言葉が箴言にある。(箴言16：32)

しかし、柔和と自己卑下とを混同してはならない。なぜなら、柔和には克己が含まれており、それは弱いものではなく、雄々しい特質だからである。救い主はいつでも進んで神のみこころに従いたもうた。苦悶の最中にさえ、主は「わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」と言っておられるのである（ルカ22：42)。

「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。」（マタイ5：6）

真理を求める者は、豊かに恵まれるであろう。近代の聖典である教義と聖約には、次のような約束がある。「われに近づけ、さらばわれ汝らに近づかん。熱心にわれを求めよ。さらば、汝らわれを見出さん。求めよ、さらば与えられ、叩けよ、さらば開かるることを得ん。」（教義と聖約88：63）

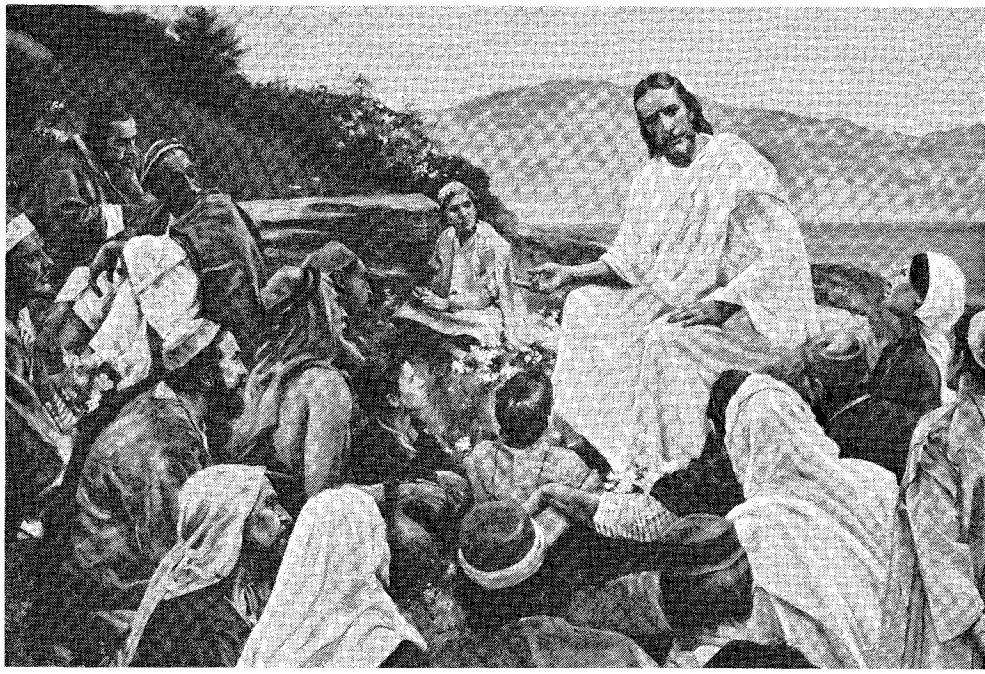
私たちは義を放射することによって神への愛を立証することができる。本当に義に飢え渇いているならば、この地上に私たちを送られた神のみこころを知って、それを行なうようにしなければならない。私たちは神の戒めを守ることによって大きな祝福を受けるであろう。主が言われた次の言葉を心に留めていただきたい。「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」（教義と聖約82：10）

「あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。」（マタイ5：7）

あわれみをかける人はあわれみを受けるであろう。

あわれみについて語った次のような言葉がある。「人に手を差し伸べ、励ますこと以上にその心を高めるものはない。」

救い主は必要なときにはいつも、いかなる場合にも、人に赦しを与え、あわれみをかけられた。そして、このように教えられた。「あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。人をさばくな。そうすれば、自分もさばかれることがないであろう。また人を罪に定めるな。そうすれば、自分も罪に定められることがないであろう。ゆるしてやれ。そうすれば、自分もゆるされるであろう。」（ルカ6：36、37）



さらに主は、十字架上で最期を迎えようとしておられたときにさえ、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と言っておられる。(ルカ23：34)

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。」（マタイ5：8）

キリストが語っておられるように、心の清い人は神を愛し、神を知るようになる。そして、神と同胞に対する愛は、清い性格をもたらすのである。

箴言にあるように、「人となりはその心に思うそのままであるからだ。」（箴言23：7、欽定訳より和訳）

予言者ジョセフ・スミスは次のように語っている。「神が現在おられる所へ行きたければ、神のようにならなければならない。すなわち、神が有しておられる原則に従わなければならない。なぜなら、もし神へ近づいていなければ、神から遠ざかり、悪魔へ近づいていることになるからである……。

あなたの心を省みて、自分が神のようであるかどうか見てみなさい。私は自分の心を省みて、あらゆる罪を悔い改めたいと感じている。

神は徳高い御方ではないだろうか。では、あなたも徳高くありなさい。神が誠実な御方であるなら、あなたも誠実でありなさい。あなたの信仰に徳を加え、徳に知識を加え、あらゆる善なるものを捜し求めなさい。」（*History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」、4：588）

またこのようにも語っている。「徳高く、清くありなさい。正直かつ誠実な人になりなさい。神の戒めを守りなさい。そうすれば、善と悪、神に属す

る事柄と人に属する事柄の相違をさらに完全に理解できるようになるであろう。そして、あなたの道は義人の道に似たものとなり、完成の日まで輝きを増すことだろう。」（「教会歴史」、5：31）

神のようになろうとするときに、私たちは思いと行ないからあらゆる不義なるもの、汚れたものを追い払うために全力を尽くすであろう。そのときに、私たちの思いは高められ、心は清められる。

「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。」（マタイ5：9）

平和をつくり出す人とは、自分自身と同胞を争いから救おうと努めている人である。私たちの天父は平和を喜ばれる御方である。従って、平和をもたらそうと努める人は皆、その点では神に似ており、神の子と呼ばれるのである。

キリストは、平和をつくり出す偉大な御方ではなかっただろうか。主は、人々が平和に暮らせるように、互いに愛し合い、理解し合うことを勧めておられる。

主は、敵を含めたすべての人々を愛するように私たちに命じておられる。私たちに平和をつくり出す人となるよう期待しておられるのである。また主は私たちに、主御自身の用いられる方法によって意見や考え方の合わない人と和解するように求めておられる。怒りの気持でし返しをすることなく、暴言を慎むのが主のみこころである。すなわち、怒るよりも、もう一方の頬を向け、もう1マイル共に行き、上着を与え、外套さえも与えるがよいというのである。

八福の最後の教えはこうである。

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。」（マタイ5：10）

次いで主は弟子たちに次のように言っておられる。

「わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。

喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」（マタイ5：11、12）

今日の教会員は、暴力や危害といった外的な迫害にはほとんど遭わない。しかし、社会から受ける圧力も一種の迫害と言えるであろう。特に、教会の若人が現代の教会の指導者によって定められた服装や道徳の標準に従って生活するときに、同年代の他の若者たちから加えられる圧力は、そのひとつと言える。しかし、もし彼らがよく祈り戒めを守って生活するならば、これらの高い標準を幸いに感じ、非難に立ち向かうことができるであろう。

教会の若人はいつも次のことを覚えておくべきである。すなわち、バプテスマを受ける者は、イエス・キリストのみ名を自らの身に受けるのである。従って、その者は神の原則と現代の指導者の教えを擁護することを誇りとすることができる。さらにそうすることによって、現世においても、来たるべき永遠の世においても豊かな報いを受け、天の王国を自らのものとすることができるのである。

私たちは救い主が与えて下さった原則と理想に従って生活すれば、必ず私たちの内に宿る至善に到達するのである。主に従うことは、魂に平安をもたらすことである。

あるとき、キリストはこう言われた。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」（ヨハネ14：15）　どれだけの期間、主の戒めを守ればよいのだろうか。1日だろうか。それとも1週間だろうか。1ヵ月間、主のみこころに従い、それを行なえばよいのだろうか。あるいは1年間だろうか。私の知る限り、終りまで忠実でなくとも義の報いを受けるという約束は、いかなる者にも与えられていない。救い主が教えられた原則を十分に理解し、それを生活の中で忠実に守るなら、私たちは御父と御子のみもとに戻って共に住む備えができるであろう。

キリストが与えて下さった教えに従うとき、私たちはこの上ない幸福を味わう。その教えは、私たちの歩む路上の標識である。この多難な時代に、私たちは皆、助けを必要としている。そして、もし私たちが自分の本分を尽くすなら、それは私たちに与えられるのである。また、主なる救い主の教えに従うときに与えられる大きな祝福が、現在私たちのために用意されている。

目標を定め、それに到達する過程を計画するときには、いつも八福の教えと主の戒めを心に留めるようにしようではないか。なぜならこれらは、主が生活の指針としてお与え下さったものだからである。

必要なときに主の祝福が私たちすべてに注がれるように、イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

1974年10月6日（日）第144回半期総大会午後の部における説教

『理由がありますか』

若人にはいつも最も大切な理由と目的がある。

管理監督
ビクター・L・ブラウン

先頃、青少年プログラムに携わっているある成人指導者たちが、今日の若人が直面している問題について話し合っていた。その中のひとりで、12人の子供をもつ母親が次のように述べた。

「私には、サタンが全力を奮って、若人に戦いを挑んでいるように思えます。」この言葉は何と真実を語っていることだろうか。

事実サタンは、この世が造られる以前に、善良で義しいすべての者に戦いを挑んだのである。この地球が創造される前に、霊界において大会議が開かれ、そこで父なる神は人類の永遠の生命に関する計画を提示された。その計画は、人に正義を教え、自由意志を行使して自ら進む道を選ばせることであった。イエス・キリストはその計画を支持して次のように言われた。「父よ御旨の成らんことを、栄光とこしえに父にあれ。」（モーセ4：2）　しかしルシフェルは天父の計画に手を加えて次のように言った。「われ此所に在り。われを遣わしたまえ。われ汝の子と成らん。われことごとく人類を贖いて一人だに失うことなからしめん。われ正にかくの如くすべし。これを以ってわれに汝の誉を与えよ。」（モーセ4：1）

こうして天の軍勢の3分の1がサタンに従った。最も大きな戦いが始まったのはこのときである。戦いは熾烈を極め、サタンは自ら指揮官として力を奮い、正義の軍隊に立ち向かったのである。

モーセの書の中で、主はこの出来事をさらに次のように語っておられる。「これを以てそのサタンわれに叛きて、われ主なる神のすでに人に与えたる人の自由意志を滅ぼさんとなし、しかもまたわが持てる権能を自らに与うべきことを求めたるにより、われわが生みたる独子の権能によりて彼を投げ落さしめたり。

而して彼はサタンと成れり、実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし、以てわが声に聴き従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」（モーセ4：3，4）

主の声に聴き従わないで、サタンの欲するままにとりことなった大勢の者たちに対して、サタンは大きな勝利をおさめたと思われる。同じようなことが別の時代に、別の人々にも起こっている。

すなわちペリシテ人とイスラエル人が戦いをしたが、その様子が次のように出ている。「ペリシテびとは向こうの山の上に立ち、イスラエルはこちらの山の上に立った。その間に谷があった。

時に、ペリシテびとの陣から、ガテのゴリアテという名の、戦いをいどむ者が出てきた。身のたけは6キュビット半。」（サムエル17：3，4）

並はずれた彼の巨体に合わせて、よろいと武器も巨大なものであった。彼は40日間イスラエルの前に立ってあざけった。「ひとりを出して、わたしと戦わせよ。

サウルとイスラエルのすべての人は、

ペリシテびとのこの言葉を聞いて驚き、ひじょうに恐れた。」（サムエル上17：10，11）

ここで登場するのが、ダビデという名の若い羊飼いである。彼は巨人の横柄な態度とおびえ切ったイスラエルを目にした。そこで彼は戦列の中にいる兄のところへ行って、何が起こったのか尋ねた。すると兄は彼が羊を野に残してきたことを叱った。そこでダビデは言った。「わたしが今、何をしたというのですか。ただひと言いっただけではありませんか。」（サムエル上17：29）

この若者は心を動揺させている兄に「理由がありますか」と問うている。今日、何千という若人がこれと同じ言葉を繰り返している。「理由がありますか」と。

私たちの行なっていることには、はたして、理由や目的があるだろうか。

大管長会の指示の下に、全世界の教会の12歳から18歳までの青少年を管理する責任をあずかっている者として、私は真心から「理由はあります」と申し上げる。生涯を捧げる価値のある目的がある。それは正義にかなった目的である。また教会のすべての青少年がサタンとその軍勢に戦いを挑むとき、力を結集する必要のある大切な目的である。

ダビデがゴリアテに言ったように、青少年の一人一人がサタンに対して戦いを宣するべきである。「おまえはつるぎと、やりと、投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神の名によって、おまえに立ち向かう。」（サムエル上17：45）

これまで述べてきたことからして、この結果について私は、いかなる事柄にも増して大きな信仰を抱いている。

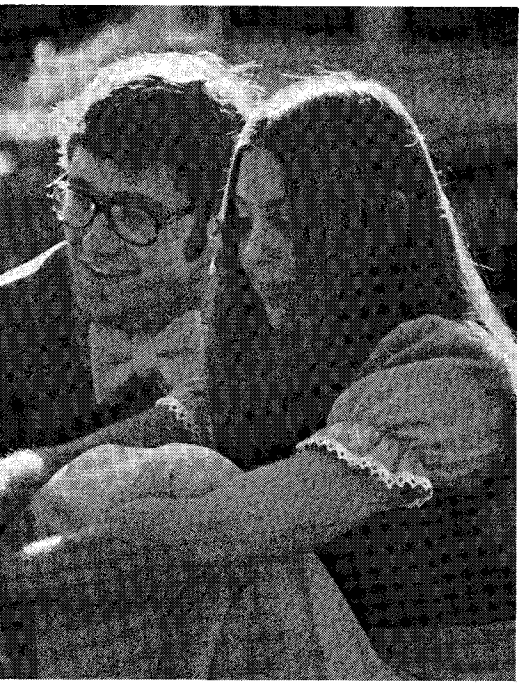
青年が今ほど雄々しさを必要としている時代は歴史上かつてない。私はこの世代の人々の霊が歴史上大切なこの時期に生を受けるよう取って置かれたことを確信している。彼らのもつ可能性は無限である。

しかし私たちはこのような楽観的な見方と同時に、現実を見る目も忘れてはならない。すべての物事には必ずその反対のものがなければならないと教えられている。従って、善悪が存在することは必要である。そして一方は救い主に率いられ、他方はサタンに率いられるのである。サタンは救い主と同じように実在している。そして狡猾である。サタンは復讐心に燃えている。人を奴隷にする戦いで、そして偽りや策略の力をかり、あらゆる手段を用いてその目的を達成しようとする。恐らく、サタンが使う最も邪悪な偽りは、神が存在しないという教えであろう。ここで私はもう一度、教会の若人にはっきりと申し上げたい。理由はある。目的はある。その理由とは、その目的とは、すべての若人がイエス・キリストの旗を固く握り、全世界に出ていって、主は生きておられ、天は開かれ、今日地上に予言者がいることを万人に告げる動機となるべきものである。

各人が神の武具で身を固めるように提言したい。そうすれば人々の模範となり、多くの人がその足跡に従うようになるであろう。そして各人がこれを行なうときに、軍勢が組織され、偉大な勝利をおさめ、結局世の人々を救い主の再臨に備えさせることになるのである。

私たちは神の武具で身を固めるとき、救い主について知る必要がある。ジョセフ・スミスは14歳のとき、知識と知恵を求めて主に祈った。すると父なる神と御子イエス・キリストが示現の内に現われたもうた。そこにはふたりの御方が立っておられた。そしてその内の御一方が他の御方を指して、「こは

わが愛子なり、彼に聞け」（ジョセフ・スミス2：17）と言われた。これが、この地上におけるイエス・キリストの福音の回復の始まりである。私たちが信仰を持つならば、研究と祈りを通して自らを備え、ジョセフ・スミスと同じように、神が生きておられ、神と御子が別々の御方であるという確信を得ることができる。そしてナザレのイエスが私たちの生活の中心となるのである。この確信を得るならば、私たちの



もつ目的は阻止されることはない。しかしこの確信が得られなければ、理由も目的も失ってしまうものである。

今まで前線をどこにおくか、その見定めがつかなかったために戦いに敗れた例が多い。しかしこの戦いは違う。実際の前線はただひとつである。それは各個人の中にあり、実際の攻撃も私たち一人一人が受ける。もちろん、そこは、効果的な防御を行なうただひとつの場所でもある。

サタンがこの戦いで勝利をおさめるのは、私たちの心をとりこにしたときである。しかし私たちが許さない限り、サタンにはそれができない。私たちがサタンと共に歩むことを拒むならば、サタンは私たちを支配する力を持たない。なぜなら、神は私たちに自由意志を与えられ、サタンはこれを取り去ることはできないからである。それ故、サタンと同じ通りを歩くこともないようにと提言したい。つまり私たちは悪そのものを避けるだけでなく、悪の兆候さえも避けるべきである。

ここで、私たちが戦っているいくつかの問題について考えてみよう。服装についてはどうであろうか。私たちの目的が正義に基づく目的であることを知るならば、N・エルドン・タナー副管長が語った賢明な勧告にも従うことができるであろう。

「慎みのある服装は、自分自身と隣人と万人の創造主とを敬う気持から生まれる心と精神の特質である。

慎みは、謙遜な礼儀正しい態度の表われである。両親と教師、青少年はこれらの原則に沿い、聖きみたまの導くままに服装と身なりと外見に関する問題について具体的に話し合い、自由意志を使って責任を引き受け、正義を選んでいただきたい。」（*Friend*「フレンド」、1971年6月号　P．3）

従って、イエス・キリストの福音の原則を基としていれば、正直と高潔と勤勉に関して私たちがいずれの側に立つかは言うまでもないことである。また道徳的な清さに関しても同様である。姦淫、不貞、同性愛、堕胎、その他愛撫行為や自慰行為は、程度や形のいかんを問わず、天父は受け入れたまわないので、私たちも受け入れないようにすべきである。麻薬、酒、タバコ、茶コーヒー、そのほかの体に有害な物質に関して、私たちの前線がどこにあるかは明確に示されている。

私たちの生活において、第一と第二の大切な戒めに対していかなる態度を取ればいいかということについては、何ら迷いの生ずる余地はないであろう。「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。」（マタイ22：37−39）

このようにして神の武具を身にまとうとき、私たちはイエス・キリストの福音を恥としないであろう。そしてたとえ特異な民とみなされたとしても、雄々しい者の中に数えられることを誇りに思うことだろう。

私はこの真理のみ旗をしっかりと握りたいと願いながら、その資格がないと感じている人がいることを知っている。予言者スペンサー・W・キンボール大管長の助言に耳を傾けていただきたい。

「末日聖徒イエス・キリスト教会の使命は、あらゆる地に住む人々に悔改めを叫ぶことである。教会員であるなしを問わず、この呼びかけに耳を傾ける人は、赦しの奇跡にあずかることができる。神は人々の目から、苦悶、悔い、驚愕、恐れ、罪の涙を拭い取って下さる。そして涙の眼は乾いた眼に、不安で心配気な顔は満ち足りた笑顔となるのである。

何という慰め、何という安らぎ、何という喜びであろうか。背罪や悲しみや罪の重荷に苦しんでいる人でも、主のもとに立ち帰り、主について学び、主の戒めを守るならば、赦され、罪から清められるのである。またすべての人は、日ごとの愚かな行ないや弱さを悔い改めることによって、同じく赦しの奇跡にあずかることができるのである。」（「赦しの奇跡」第23章）

「理由がありますか。」確かに理由はあり、目的はある。私はこの教会の若者の一人一人がこの福音の旗を固く握りしめて、両親や監督やその他の成人および青少年の指導者と共に協力し、天父の王国における栄えある勝利に向かって行進するようチャレンジしたい。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

1974年10月6日（日）第144回半期総大会午後の部における説教

平和の祝福

すべての人は平和をつくり出す人にならなければならない

十二使徒評議員会補助
フランクリン・D・リチャーズ

19世紀前の過越の祭のときに、主なる救い主イエス・キリストは、約束と訓戒を含む次のような偉大な言葉を与えられた、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」（ヨハネ14：27）　今日の世界にはおびただしい争いと論争が見られる。従って、平和をテーマにして話すのが最もふさわしいと思う。

平和がなければ幸福などあり得るはずがない。にもかかわらず、世界中の善良な人々は自己の平和を求めており、そしてそれを見出すすべを知らない。

主なる救い主イエス・キリストは平和の君と呼ばれ、そのメッセージは、個人にとっても世にとっても平和のメッセージである。私たちは平和なときにこそ、この世の生涯を真に感謝し、耐え難い艱難に耐えることができるのである。

末日聖徒イエス・キリスト教会の使命は、人々の心と家庭にこの平和を打ち建てることである。ブラジルで伝道している孫から、先日手紙を受け取った。それには、改宗して1ヵ月の教会員が聖餐会で話した事柄が書かれていたが、これは私の話を裏づけるものである。「教会に入ってわずか1ヵ月しか経たない彼が，皆の前で種まきのたとえ話を話したのです。伝道中に味わう最大の喜びは、福音が人々の生活を変える有様を目にすることです。」まことにそのとおりである。

私はこれまで数多くの改宗者の証を聞いてきたが、すべての人が、福音を通していかに人生に平和と喜び、進歩成長を得たかについて語っている。

主なる救い主によって与えられた最大のメッセージは、紛れもなく山上の垂訓である。そしてこのメッセージには、豊かな人生を過ごす上での主の計画がうかがえる。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう。」（マタイ5：9）

どうしたら平和をつくり出す人になれるのかと、これまでに考えたことはあるだろうか。全くのところ、その機会はどこにでもあるのである。

確かに私たちは皆、家庭において愛と善意を示し、口論とうらみとねたみの悪を除き去ることによって、平和をつくり出すことができる。親子の間に誤解があるときには、両者の調整をはかることができる。そして、平安な気持を持って一緒に祈ることができる。

また、他人を非難しないことによって平和をつくり出すことができる。山上の垂訓に見られる、次のような主の言葉を心に留めていただきたい。「人をさばくな。自分がさばかれないためである。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれる。」（マタイ7：1、2）　非難は裁き以外の何物でもないということを考えたことがあ

るだろうか。

私たちは人を赦し、また赦しについて教えることによって、平和をつくり出すことができる。イエスは、人を何度赦せばよいかと尋ねられたとき、限りなく赦すようにと答えられた。すなわち、「七たびを七十倍するまで」赦しなさいと言っておられる（マタイ18：22）。赦しで大切な点は忘れることである。ある場合には、忘れることができるということは、覚えておくことと同じくらい重要である。

デビッド・O・マッケイ大管長は、ロンドンのハイドパークの礼拝堂を献堂した折、次のように語った。「もし平和を望むなら、それを得る責任はあなた方にある。私たちの家庭は、子供たちが守られ、気高い人に成長する温かい場所でなければならない、と回復された福音は教えている。同時にそこは、年老いた人が休息を得、祈りの捧げられる所でもある。」(*Church News*「チャーチ・ニューズ」、1961年3月11日、P.15)

幾人かの若者たちをオフィスに呼んで、次のように話した、あるとても賢明な監督がいた。「今ひとつのことを試みたいと思ってるんだが、是非君たちに手伝ってもらいたい。それは何かというと、ひとりの人間がその家族にいかに影響を及ぼすかを証明することなんだ。それで、これから1ヵ月間、君たちがそれぞれ家庭で平和をつくり出す人になって欲しいんだよ。でも、このことは家族に何も言わないこと。ただ親切と思いやりをもって行動して欲しい。そして模範を示して欲しいんだ。君たちの家族の間でけんかや口論があったら、愛と調和と幸せに満ちた雰囲気をつくり出して、これらの過ちを負かすように、全力を尽くしてもらいたい。

また、君たちがいらいらすることがあったり、家族の中にいら立ちが見えたりしたら、自分自身をコントロールし、他の家族も自分自身でコントロールできるように助けて欲しい。実は、私たちのワード部のすべての家庭が、マッケイ大管長の言われた『温かい場所、地上における天国の一部』になるかどうか見てみたいんだ。では、1ヵ月経ったらもう一度集まるので、そのときに報告して下さい。」

これは彼ら若人にとってチャレンジであった。そして、彼らはこのチャレンジにみごとに応えたのである。1ヵ月経ったとき、彼らは次にあげるような報告を監督に行なった。

ある若者はこう言った。「僕は自分の家でこれほどの影響を及ぼせるとは夢にも思いませんでした。この1ヵ月はいつもと全く違いました。僕自身や僕の態度が原因で騒ぎや口論がどれほどひんぱんに起こっていたかよくわかりました。」

また、ある姉妹はこのように語った。「私たちはごく普通の家族だったと思います。でも、自己本意のため、ほとんど毎日のようにいさかいがありました。けれども、弟や妹に働きかけた結果、あれほど多かったいさかいがなくなり、家庭には愛の精神が満ちるようになりました。皆さんも家庭に平和の精神を宿らせるよう実際に努力する必要があると思います。」

もうひとりの姉妹はこのように報告した。「その通りです。私がこの試みを始めてから、私たちの家庭には愛と協力と思いやりの気持が高まりました。でも、一番変わったのは、私自身の心です。私は良い模範を示し、平和をつくり出す人になろうと一生懸命でした。そして今、これまでになく自分自身が高められていることを感じています。とても平安な気持です。」

その通りである。家族のいさかいで家庭を分裂させてはならない。口論する夫婦は、自分自身の平安もさることながら、子供たちの平安をも破壊するのである。

それほどまで望んでいる平和と保証を、なぜあなたは人生から締め出そうとするのだろうか。今日、大勢の人々が、悩みや疑い、心配で心をふさぎ、平安を得られずにいる。また多くの人々が、大きくなったときに自分はどのようになるのだろうかという恐れに取りつかれている。先日、神殿で働いている80歳を越えたやさしそうな老婦人に会った。彼女の周囲には、実に平和で物静かな雰囲気がただよっていた。彼女はほかの人を助けるのにとても忙しく、自分のことを心配する暇がほとんどなかった。それでいて彼女は生活に困ることもなかったのである。「主が私の必要としているものをいつも満たして下さいます」と言うのが、その老婦人の言葉だった。

主はこのように言っておられる。「されど汝知るべし。正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん。」（教義と聖約59：23）

然り。主は私たちの必要としているものに心を配って下さる。そして、私たちが自己の本分を尽くし、主を信じて主に信頼を置き、隣人に仕えることを通して主に仕えようとするときに、わずらいとなる事柄を打ち負かす助けを与えて下さるのである。私はこれを私自身の生活に、親族や友人の生活に、また全世界の大勢の人々の生活の中に見てきた。これこそ平和を得る唯一の方法であり、個人の平和、すなわちこの世のものでない、私たちの理解を越えた、しかもなお私たちに快いものを与えてくれるものなのである。

今日の世では、これまでになく平和をつくり出す人々が求められているように思う。この世が平和をつくり出す人を全く必要としていなければ、救い主は決して、「平和をつくり出す人たちは、さいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう」（マタイ5：9とは言われなかったであろう。

平和をつくり出す人は福音の原則に従って生活するときに、聖霊を通して証を授かる。これが、平和をつくり出

す人となることによる恵みである。そのような人は、人知ではとうてい測り知ることのできない平安、ゆとりある心を喜び、幸福、満足、成長、進歩を享受するのである。私自身もこれが本当であることを知っている。

ここで私の証を述べたい。父なる神とその御子イエス・キリストは生きておられる。また、予言者ジョセフ・スミスを通じて、イエス・キリストの完全な福音と、神のみ名によって働く力がこの地上に回復された。さらに今日、スペンサー・W・キンボール大管長が生ける予言者として、地上のイエス・キリスト教会の諸事を指導し指示しておられる。主の類ない祝福がキンボール大管長に注がれ、また私たちが大管長の勧告と助言に勇気と良き判断力をもって従えるように願ってやまない。

私たちそれぞれが、日々の生活において、平和をつくり出す者となり、また人知でとうてい測り知ることのできない平和を享受するよう、イエス・キリストのみ名によって祈る。アーメン。

1974年10月5日（土）第144回半期総大会午前の部における説教

「義にかなう事柄を続けて行なう」

福音の求めるところは、終りまで忠実に堪え忍ぶことである。

七十人最高評議員会員
レックス・D・ピネガー

私は3年にわたってバージニアで伝道部を管理する特権を完うし、このたび家族と共に帰ってきた。この間宣教師の努力と信仰を見て、私は主に対する奉仕の業を続ける人々に与えられる祝福を今まで以上にはっきりと知ることができた。また、現在七十人の職に召され、これからも続けて伝道の業に携わることができることを主に感謝している。

私が最近までいた伝道部からのひとりの帰還宣教師が、家庭の問題について私に相談に来た。そのとき、私はこの奉仕の特権をさらに深く感じること

ができた。この若者は2年間の伝道をよく務め、困難なときにあっても、信仰と勇気を示してきた。今彼は、宣教師時代に持っていた熱意と霊感を、さらにむずかしい障害が存在する自分の家庭の中にあっても保ち続けるというチャレンジに直面しているのである。

自分がどんなに素晴らしい家族に恵まれ、伝道期間中にどれほど援助してもらったかを話してから、彼はこう切り出した。「でも、家族のもとへ戻ってきて苦痛に思うことがひとつあるんです。みんな猟に夢中なんです。以前は私も好きでしたが、今は違います。一番困ることは、日曜日に私も一緒に猟に出かけるよう家族が望んでいることです。こんなわけですから、今すぐに決心をしなければならないのです。もちろん日曜日に猟に行くのはいやですが、でもそのために、家族の気分をそこねるようなこともしたくないのです。何かよい方法はありませんか。」彼の話では、家族は別に悪気があってそうしているのではなく、ただ長年の習慣をそのまま続けているにすぎないとのことだった。

この宣教師のように正しい道を歩み続けるか否かの決断に迫られている人には、オリバー・カウドリの経験を思い出すように勧めたい。オリバーは、はじめ、忠実かつ謙遜な態度で神の王国における務めに携わっていた。その報いとして、主は彼に翻訳の賜を与えたまい、さらに自分の務めに続けて忠実に励むならば、人々に真理を得させる上で驚くべき貢献をするであろうと言われた。その後、オリバーは翻訳を試みたが、失敗に終わった。その理由を主はオリバーに、「汝が嘗て翻訳し始めし時に始めたる如くに翻訳の業をつづけざりしによる」(教義と聖約9：5)と告げられた。つまりオリバーは義にかなった努力を続けなかったために、その賜を取りあげられてしまったのである。

言葉を換えて言えば、正しく忠実に主の業を「始めた」者に与える主の勧告は、「始めたる如くに続けよ」ということである。また私たちは、ヒラマンの息子ニーファイの模範に従うこともできる。ニーファイは熱心に人々に教え、義しい生活を守ってきたが、人々は彼の勧告を受け入れず、悔改めを拒んだ。そのために、彼はあきらめて家に帰ることに決めた。ニーファイが家の近くまで帰ってくると、主の声が聞こえてきた。主はニーファイがうまずたゆまず熱心に努め、人々を教え、主の戒めを守ってきたことに対して祝福を授けようと言われた。そこでニーファイは新たな力を得て決心を固めると、家には帰らず、再び自分の務めに立ち戻り、始めたときと同じようにそれを続けて行なったのであった。(ヒラマン10：2－12参照)

またイノスも悟りを開く体験をしている。イノスは、正しい両親の教えに従い、その教えを土台にして生活を築くことによって祝福がもたらされると告げた。彼は自分の父を「正しい人」であると言い、次のように語っている。「私の父が父の言葉で教え、また主の愛と誡命とを私に教え……私の父が永遠の生命と聖徒の幸福について教えた言葉を度々聞いたのが私の心に深くしみこんだ。」(イノス1，3)この正しい父親から絶えず与えられた教えを通して、イノスは自分の心が飢えるのを覚え、主の前に出てゆき、自分の身と霊のために一心に祈りかつ願った。

イノスもまた義にかなった事柄を続けて行なうことの大切さを知っていた。そのことについて、彼は「一日中神に祈り、夜になってもまだ私の声が天にとどくほど大きな声で祈った」(イノス4)と言っている。イノスの絶えまない熱心な祈りの結果、天から驚くべき宣言が示された。「すると一つの声が聞えて『イノスよ、汝の罪はすでに許されたれば汝は祝福を受くべし』と仰せになった。」(イノス5)

イノスが自ら主を求めたが背景には、父親の正しい教えの影響があった。つまりイノスは自分が始めたことを続けて行なったのである。

続けるということには、我慢し、耐えるということ以上の意味がある。それはキリストに対して揺るぎない信仰を抱いて着実に行動に移していくことであり、真にキリストに従う者となることである。

「イエスは自分を信じたユダヤ人たちに言われた、『もしわたしの言葉のうちにとどまっているなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう』。」(ヨハネ8：31，32)

また、続けるということは、万難を排して進むことでもある。

「さて、私の愛する兄弟たちよ。私は尋ねたい。あなたたちはこの真直ぐで狭い道に入ったら、それで万事終りであるか。ごらんそうではない。あなたたちがもしもキリストの言葉によってキリストを確く信仰し、人を救う大きな能力のあるキリストの功徳に全く頼らなかったなら、あなたたちはここまで進んでくることさえできなかったのである。

それであるから、あなたたちはこれからもキリストを確く信じて疑わず、完全な希望の光を抱き、神とすべての人とを愛して強く進まなければならない。それであるから、この後もたえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み、終りまで堪え忍ぶならば『永遠の生命を受ける』、かくの如く天の御父が言いたもうた。」(IIニーファイ31：19，20)

義にかなう事柄を続けて行なうには、勇気を持ち、堅い決心をする必要がある。また正しいことに対立する反対の力が存在することも知っていなければならない。時には苦難に遭い、また疲れから決心を鈍らせられることもある。それは、私たちが正しいことを続けて行なおうとする以前に克服しなければならない。利己的な動機や肉体的な欲望であることもある。しかし、いかなる場合も、幸福を得るためには万難を排して進むことである。キンボール大管長は、私たちが置かれた状況の中で最善を尽くすならば、主が扉を開く方法を備えて下さるであろうとはっきり

約束している。

ふたりの姉妹宣教師が、ある小さな町で人々の心の扉を開くために、すでに1週間も熱心に伝道していた。しかしふたりがほとんどすべての家で出会ったものは、拒絶とあざけりの言葉であった。その日は特にひどく、ふたりは落胆し、疲れ切って宿舎に帰った。ふたりはこれ以上このような障害に立ち向かうことができないと思った。そこでいろいろと話し合い、祈り、その結果翌朝もう一度出かけて伝道を続けることにして、その夜は床についた。次の朝、彼女たちはその日の障害に立ち向かう力をいただけるようにと主に願い求めた。するとその日訪問した家族のほとんどが、メッセージを喜んで聞いてくれたのである。主は彼女たちの不断の努力と信仰を祝福され、人々の心の扉を開けて、回復のメッセージに耳を傾けさせたもうたのであった。

ある家族を7年間も忠実に訪問し続けたホームティーチャーがいる。その結果、その家族の父親は招きに応じて、教会に活発に集うようになった。

またある若い主人は、教会が真実であるかどうか自分自身で見定めよう、と決心した。それは、すでに6年前に末日聖徒イエス・キリスト教会に入っていた妻子の生活が徳高く変わっていたからである。それで彼はモルモン経を手に取って、読み始めた。最初は何も感じなかったが、それでも読み続けた。彼はまた、かつて宣教師が助言してくれた、読むときには祈るようにという言葉を思い出した。それから6日間、モルモン経を読み、祈ることを繰り返した。そしてこれらの聖句の中に含まれている真理を理解させて下さるようにと主に願い続けた。

それからさらに2晩続けたところ、次第に深い霊的な体験をするようになった。彼は自分が読む声を聞いてよく理解できるようになったのである。それは印刷された活字を言葉に表わすというよりは、むしろ物語の登場人物が語っている言葉を聞いているようであった。彼は祈り、学び続けた。そして10日目の晩に、モルモン経中の人物の声が実際に聞こえると言えるほどになった。彼らの伝えるメッセージのみたまを感じとることができたのである。

彼はこの不断の努力により、真理を求めるにあたって、主に近づくことができた。そして、モルモン経が真実であるという証を得たのである。

ある婦人は、子供たちに父親を敬うように37年間も教え続けた。そしてそのようにすればその父親がいつか神権を尊ぶようになると約束した。この約束は実現し、彼は熱心にかつ忠実に主に従う者となったのである。

かつて忠実な開拓者たちは、ユタへの辛苦に満ちた旅を続けながら、「聖徒らよ進め」（「試しは多くも」、讃美歌193番）と歌ったものである。そして今日、教会の若人は現代の試練に直面するとき、「続け、励め、進め」（「山の如く強く」、讃美歌65番）と歌っている。

このほかにも、義にかなう事柄を続けて行なったことで祝福を授かった数多くの例がある。その反面、義の道からそれて不正なことを行なっているため、主の祝福を受けられなくなった人々の例も数限りなくある。

主が私たち一人一人を祝福し、私たちが義にかなって始めた事柄を続けて行なう力と勇気と信仰を、与えて下さるように祈っている。神が現在も生きておられることを証し、また私たち一人一人が主の勧告に従って義にかなった生活をし続けることができるように祈るものである。すべてをイエス・キリストのみ名によって申し上げる。アーメン。

1974年10月4日(金)第144回半期総大会午後の部における説教

キリストに対する証

キリストは神の御子であり、私たちの贖い主、世の救いである。

十二使徒評議員会補助
ジョセフ・アンダーソン

人類が今日最も必要としているのは、次の3つの事柄に対する心からの確信である。第1に、イエス・キリストが昔も今も実際に世の救い主、贖い主であるということであり、第2にはイエス・キリストが神の御子であり、御子の生みたまいし独り子にして霊の長子であるということ、そして最後に、イエスはアダムとイブが破った律法を償い、また私たちが死より復活して再び天父の御前に立ち返ることのできる道を備えるために、この地上に肉体を受ける必要があったのであり、そのことは、世界が創造される以前に御父が定められた計画の一部であり、必要なことであったということである。

ヨハネによる福音書の第1章を開くと、「初めに言があった。言葉は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった」（ヨハネ1：1、2）と記されている。これは、キリストでありエホバであり、偉大なるわれ有りの御方が前世において神と共にあったことを示すものである。キリストは計り知ることのできないほど長い期間、御父から教えを授けられたのであった。

私たちはこの地上に生を受ける前、天父の子供として霊の状態で天に住んでいた。

そして今、肉親の父を知っていると同様に霊の御父を知っていた。また長兄であるエホバや暁の子ルシフェルをも知っていた。当時私たちには視覚があった。しかし今、前世において得た視覚による知識や記憶は私たちの心から取り去られ、私たちは信仰によって生きることを求められている。讃美歌に歌われている通りである。

深きみむねにて
われ世に降し
友と生まれとの
思い出とめぬ

讃美歌140番

天上の会議において設定されたこの栄えある計画によって、私たちは地上に生を受け、数々の困難な問題に挑み、また多くの経験を積むという特権を得ることができた。

私たちは前世にいたとき自由意志を持っていた。世界を創造しこの地球を人で満たすという問題が考慮された会議において、御父はひとつの公平な計画を提起された。それは他の諸々の世界で用いられてきたものであった。エホバは語っておられる。「父よ、御旨の成らんことを、栄光とこしえに父にあれ、と。」（モーセ4：2）

ところが、ルシフェルはその計画に対し全人類を強制的にひとり残らず救うという修正案を出して争った。これは自由意志に反するものである。ルシフェルは野心に燃え、御父の誉れを我がものにしようとした。聖典にはこのように記されている。「見たまえ、われ此所に在り。われを遣わしたまえ。われ汝の子と成らん。われことごとく人類を贖いて一人だに失うことなからしめん。われ正にかくの如くすべし。これを以てわれに汝の誉を与えよと。」（モーセ4：1）　この計画は自由意志の権利を滅ぼし、進歩成長の機会を奪うものであった。また子供たちに、自らの信仰と努力によって御父に似た者となる機会を与えるという御父の目的に反するものであった。自己本位の厚かましい計画だったのである。

私たちは前世すなわち霊の状態にあったとき、霊が自由意志を持っていたこと、また従順や義の度合に様々な段階があったことを知らされている。ルシフェルは御父のみこころに背くことで自らの自由意志を行使したが、その謀叛に対して報いを受けなければならなかった。それは今なお続いており、ルシフェルに従った霊たちも同様その報いを受け続けているのである。彼らは肉体を得るという特権を拒絶され、それがためにのろいと失意の日々を送ってきた。

「黎明の子、明けの明星よ、
あなたは天から落ちてしまった。
あなたはさきに心のうちに言った、
『わたしは天にのぼり、
わたしの王座を高く神の星の上におき、……
霊のいただきにのぼり、
いと高き者のようになろう』。
しかしあなたは陰府に落され、
穴の奥底に入れられる。」（イザヤ14：12—15）

エホバに従った霊たちは肉体を得るためこの地球に送られたとき、決して同じ能力、同じ性質を備えていたのではない。この世で生活するという機会と恵みを与えられた霊も、忠実さの度合は様々であった。しかしながら、「主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん」ために、彼らはこの地上での生活を経験するに十分ふさわしいと見なされたのである。神の命じられたこの戒めを守り、生命と救いの計画に従うことによって、人は永遠の生命を得、天父の御前に立ち返る。そして神からよしとされ、忠実の報いを受けるのである。

先見の明を持ち、前世における子らの状態を知っておられる神は、ルシフェルの策略や誘惑に負ける者がおり、また多くの者が道をはずれることを知っておられた。また、アダムとイブが

自らの自由意志と選びによって禁断の実を食べ、そのことによって神の霊の子らに肉体を受ける道が開かれることを、人がこの地上に誕生する前から御存知であった。従って神は、贖い主が必要であり、また贖い主による罪の贖いも必要であることを承知しておられたのである。

アダムの咎は贖われる必要があった。人は自らの罪に対して罰を受けるが、アダムの咎に対して罰を受けることは要求されていない。アダムの子孫にその義務はないのである。アダムは律法を破るという不従順の結果咎を受けた。しかしそれは人類があるため、すなわちこの世の生活を送る特権にあずかると共に自由意志を行使し、努力を重ねて自己の救いを遂げることができるという大いなる祝福になったのである。

神は御自分の愛する子がその使命、すなわち堕落を生じたアダムとイブの罪を贖う責任を引き受けること、それに救いと昇栄の根本となる戒めを守ることを条件に、人が自己の犯した罪に対して赦しを得られるようになることを望んでおられた。

イエスが時の絶頂にこの世にお生まれになったとき、イエスを天地の創造者、救いの源、贖い主として認めた者はごくわずかであった。弟子でさえその使命を完全には理解していなかったのである。イエスは人類を救うため命を捨てられること、また御自分に従うすべての者にとって今も将来も救い主となることを教えられた。また墓より出でて新たに生まれ変わり、復活体となって現われると教えられたが、弟子たちにとってはそれらの意味を理解することは困難であった。

私たちは新約聖書の中の弟子たちやその他の人々に与えられた話だけに頼っているのではない。ほかにも記録があり証がある。はし書きによると、モルモン経は以下の目的で私たちの手に与えられた。「イスラエル一家の残りの子孫に、その先祖のために主が為したもうた大きな御業をことごとく示して、残りの子孫が主の誓約を知り、かれらはいつまでも棄てられないと言うことを知らせ、またユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させるためである。」（モルモン経、はし書き）

この記録には、救い主が復活した後アメリカ大陸の住民に姿を現わされたことが記されているが、そのとき、救い主は人々に福音、すなわち生命と救いの計画を、東半球の大陸でお説きになったと同様に教えられた。モルモン経はまた、イエスのベツレヘムでの誕生と死のときの西半球の状態について述べている。

イエスはニーファイ人を訪れると、手を伸ばして群衆に次のように話しかけられた。

「『見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。

われは世の光にしてまた世の命なり。われは御父がわれに授けたまいしかの苦き杯をすでに飲み、世の人の罪をわが身に引き受けて御父の栄光を示したり。世の人の罪をわが身に引き受くることに於て、われは最初よりすべて御父のみこころに従えり』と。」（Ⅲニーファイ11：10，11）

この教会にはさらに、御父の生みたまいし独り子とその使命について述べた高価なる真珠という聖典がある。聖書から、モルモン経から、また高価なる真珠に記されているようにアブラハム、エノク、モーセに与えられた話から、私たちは救い主の誕生と死、そしてその偉大な使命について知ることができる。いかに恵まれていることであろう。

これら聖典に記されていると同じイエス、すなわち復活したキリストは、この神権時代に時に臨んで人にその姿を現わされた。

さらにまた、私たちはそれらの顕示が真実であり完全なる福音が回復されたことが真実であるという証を、聖霊のささやきと勧めによって得ている。なぜなら、私たちには天より回復された権能によって聖霊の賜が授けられているからである。この権能は時の絶頂においてその権威、権能を保持していたペテロ、ヤコブ、ヨハネによって回復された。これは確かであり全く反駁の余地はない。

末日聖徒イエス・キリスト教会にあって、私たちは生けるキリストを礼拝している。そして、キリストが死よりよみがえり、現在復活体を有しておられること、また御父と共に私たちの擁護者であって、キリストとその福音に従うことによってのみキリストと御父のみ前に立ち返ることができるということを知っている。

イエス・キリストは私たちの贖い主、救い主である。また霊において御父の生みたまいし子、御父の長子であり、肉における独り子、私たちの長兄である。キリストは神会の第2番目の御方である。また御父の指示のもとに天と地を創造された創り主である。彼はまた旧約聖書のエホバであり、ナザレのイエスである。

キリストは道であり、真理であり、命である。また世の光であり、救いの源であり、地の基いが置かれる以前に私たちの罪のために犠牲として捧げられるよう選ばれた神の子羊なのである。最後の時に、すべての者は皆そのひざを折りかがめ、ことごとくの舌はイエスはキリストなりと告白するに違いない。主はアダムの罪を贖うため十字架上の死を遂げられた。もし私たちが主を受け入れ、主の下された戒めを、すなわち生命と救いの計画を守るならば、自己の犯した罪に対して赦しを受けることができる。主は死よりよみがえった復活の最初の実であり、それによって全人類は現世の生涯を終えた後再びよみがえり、復活した状態で生きることができるのである。然り、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3：16）

人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすこと、すなわち父なる神と御子イエス・キリストの前に救いと昇栄を得させることは、主の業であり主の栄光である。（モーセ1：39参照）

一方、私たちの使命および責任はこのメッセージを世の人に伝えることである。地が創造される前、救い主は天上の会議においてひとつの使命を託されたが、その使命を遂行して行く上で主を助けることが私たちの業であり栄光なのである。

予言者たちが予言したように、この神権時代、救い主は力と大いなる栄光のうちに再び降臨され、義と平和のうちに1千年を支配し統治されるであろう。

私はこれらのことが真実であることを証する。贖い主は生きておられる。私はこの証を信仰を持って真心から、私たちの救い主、贖い主であるイエス・キリストのみ名により証申し上げる。アーメン。

伝道に注ぐ決心

東京第4ワード部
柳原　浩

末日聖徒であれば、だれでも伝道したいという気持を持っていると思います。特に若い神権者はフルタイム宣教師として伝道に出ることを目指していると思います。私は大学2年生のとき、ふたりの宣教師を通して福音を聞き、この教会へ入りました。この教会に集っているうちに伝道したいという気持は少しずつ大きくなって行きました。最初学校の友だちを教会に連れてきました。でもだれも最後まで聞いてくれませんでした。次に宣教師と一緒にチラシ配りをしたり、モルモン経を使ってストリート・コンタクトをしたりしました。何度も断わられた後、初めてモルモン経を売って250円をもらったとき、自分がもうかるのでもないのにとてもうれしかったことを覚えています。それから伝道が楽しみになりました。でも、一方つらさも少しずつ経験しました。

私は次第にフルタイム宣教師として伝道に出たいと思うようになりました。でも、そのためには、もっと強い確信が必要でした。「お前は伝道に出なさい」という神様の声を聞きさえすれば、私はきっと伝道に出るだろうと考えていました。日曜日、だれもいなくなった礼拝堂でひざまずいて祈りました。でもいくら祈っても答えはありませんでした。私はどうして答えがないのか考えに考えた末、もっと神様に近づいて祈ったらいいのではないかと思いました。礼拝堂よりも、その上の屋根で祈った方が、もっと近づけると思い、次の日曜日、夜になってから教会の屋根の上にのぼって、そこでひざまずいて祈りました。モルモン経にイノスは一日中祈ったとありましたから、私も一晩中祈ろうと思っていました。でも、いくらたっても声は聞えてこないし、ひざは痛くなり、手は冷たくなってきたので、健康のためにやめました。

結局、私は聖典に書かれてある言葉を信頼して伝道に出る決心をしました。教義と聖約15章、16章の6節に「さて見よ、 われ汝に告ぐ、 すなわち汝にとりて最も価値あることは、汝今の代の人々に悔改めを宣べて人々をわれに導き、以て彼らと共に父の御国に休まんことなり」とあります。主は私たちに何が最も価値があるのか教えています。主のみこころははっきりしていました。私は主の価値観に従って最も価値あることから順番にしたいと思いました。私は大学3年生になっていましたが、 3年が終わったら学校を2年間休んで伝道に出ようと決心しました。

私は伝道に出るとき、この「決心」ということが一番大切だと思います。私たちが望みもしないのに主が私たちを召されることはないからです。まず私たちが自分自身で決心しなければなりません。主は「されば汝らもし神に仕えんと望むならば、汝ら神の業に召さるるなり」と言っておられます。私がいくら祈っても答えが得られなかったのは私が自分でまだ決心していなかったからです。伝道に出るように決心してから、私の心は平安になりました。私はこの平安が聖霊の力によってもたらされたことを知っています。

私は家族にこの決心を伝えました。伝道に出たいことはそれまで家に帰るたびに話していましたが、私はそれでも便せんに10枚か20枚書かなければ理解してもらえないと思っていました。お祈りをして手紙を書き始めました。1枚書き終わったとき、私はもうそれで十分だという確信を得ました。やはり思った通り家族はよく理解してくれました。

次に学校の許可をもらうため、学科主任の教授に話すことにしました。私の通っている大学は、工業関係の学校でキリスト教とは全く関係のない学校でした。何をどう話したらいいものかわからずに学校へ行き、そこで「みたま」の助けがあるように，また教授の心を和らげてくださるように祈りました。そして教授の部屋に行き、用件を話しました。教授は伝道することには賛成だが、今学業を中途にして行くことには反対だと言いました。このとき、教会の伝道活動についてよく話しました。が、キリスト教に無関心な教授たちが多いから休学することはむずかしいということでした。とにかく休学できるかを教授会で聞いてくださいとお願いして帰りました。でも案の定だめでした。教授に、どうしたらいいか相談しました。ひとつの方法として退学についても話しました。両親も教授もそれについては反対でした。でも最後にいい方法を教えてくれました。それは2年間、行方不明になることでした。そうすれば学校の方も私に連絡がとれないから、処分することもできないということです。そして2年たったら私がひょっこり現われる。万一の場合退学にならないように授業料だけは払わなければいけませんでした。大学の事務室に行って2年分払いたいと言いましたが、あと1年で卒業の私が2年分の授業料を払うというので変な顔をしていました。

しばらくして伝道の召しがきました。お別れのあいさつに教授の部屋に行ったとき、本棚から1冊の本をとってプレゼントしてくれました。そして私にだけは連絡をとるようにということでしたので、手紙を書くことを約束しました。

教授との何度かの話合いの間、私は不思議なことに気付いていました。それは、伝道なんかに出てもらっては規則にふれるとか、学校が困るというようなことは一言も言われなかったことです。教授が私に何度も尋ねたことは「君は本当に伝道に出たいのか？」ということでした。そしてこれは私の両親が私に尋ねたことと全く同じでした。私は両親に伝道資金の援助をお願いしましたが、お金がどうこうと言うことは一言も言わないで、私が本当に伝道に出たいのかということを聞きました。

自分だけが決心したからそれでいいというものではありません。私たちには家族があり、学校があり、また会社があります。私たちはよく話さなければ、いけません。そのとき、聖典に言われている「説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛が」本当に大切です。そしてこれらは伝道するときにも、福音を教え、また戒めを教えるときにも、とても大切です。

私は伝道に最も力を入れているこの末日聖徒イエス・キリスト教会が大好きです。この教会は真実です。そしてこの福音は本当に人々を幸福にしています。イエスがキリストであること、私たちの救い主であることを証します。そして主は私たちに伝道するように命じられました。

イエス・キリストのみ名を通してお話ししました。アーメン。

好きなウィスキーとの別れ

堺支部
神野普司

この教会に入る前、私は大変な酒好きで、毎晩ウイスキーを飲んでいました。また日曜日はいつもゴルフに行っていました。そんな生活をしていた私の家に宣教師が訪れたのは、一昨年の11月の末頃でした。最初の訪問を受けたときは私が不在でしたので、妻から外人がふたり来ていたということだけ聞きました。それから何回か彼らは訪問して来ましたが、私はいつも不在でした。しかし妻に私が家にいそうな日を聞いて帰ったそうです。

そして12月の初め頃、私が夜帰ってウイスキーを楽しんでいるとき、ベルが鳴りました。妻が出て行くと「御主人様はいらっしゃいますか」という外人の日本語が聞こえてきました。私が出て行くと「大変すばらしい映画をお見せしたいのですが、5分間だけよろしいですか」と彼らは言ったので、5分ならよろしいといって部屋に入ってもらいました。ひとりは背が高く、ベネット長老と言いました。もうひとりは背が低くてヘスロップ長老といいました。大変愛想の良い顔をして握手をし、子供たちにも愛きょうをふりまいていました。そして見せてくれた映画は「モルモンとは」というものでした。そして帰るときに、もっと詳しく説明したいのでまた来たいが何日がよいかと質問し、木曜日を約束して帰りました。

それからというものは週に2回ずつ来てはレッスンを行ないました。彼ら以外の宣教師も来ました。私は聖書を1冊だけ持っていましたので、それを持って熱心にレッスンを受け、また多くの質問をしました。彼らの言う神様というのは私たちが以前に考えていたような抽象的なものではなく、実に具体的なものであったので驚きましたが、また実によく理解できました。私は以前から何か素晴らしい信仰のようなものを求めていたのですが、何も見つかりませんでした。しかし宣教師の話を聞いているうちに、これは本物だ、これが信仰だ、と確信しました。

しかしレッスンが進むにしたがって大変なチャレンジが出てきました。知恵の言葉です。私が人生の最愛の友としていたウィスキー君と別れなければならないことになりました。また安息日を守ればゴルフができなくなるのです。結局私がこの世でつかんだ小さな幸せを全部捨てることになります。これには弱りました。

しかし宣教師たちの家族について証を聞くとき、何と幸せな家族なんだろう。私たちもできればあんな幸せな家庭を作りたいという気持が強く働きました。私たち日本人は手を合わせて拝むことはありますが、彼らのするようなお祈りの習慣はありません。しかし何とかしようと思い、食堂の壁に紙を貼って①天のお父さま②感謝すること③お願い④イエス様の名により⑤アーメンと書き食事のとき家族が順番にその紙を見ながら祈ることを練習しました。そうしているうちにクリスマスが近づきました。

12月24日夜、テレビで「王の王」という映画を見たとき、感動して涙が出ました。そして酒をやめることを宣言しました。すると飲まずにいることができるようになりました。しかし時々思い出しますので、そのときは必死になって聖典を読みました。そうすると気持が落着きました。宣教師に酒をやめたと言いました。そこで彼らは今週の29日にバプテスマを受けることができますかと尋ねたので「はい」と答えました。1973年12月29日は私たちの家族の思い出の日となりました。

この教会は神様の教会であることを証します。宣教師は神様の使いであり、神様は私たちを愛していらっしゃいますことを証します。すべてをイエス・キリストのみ名により。アーメン。

「天の窓」の恵みは沖縄にも

川崎支部
謝花良康

その日、私はきらめく夜空を見上げながら那覇空港に下立った。空港では長嶺地方部長が迎えて下さった。「天の窓」の映画やその他の資料の入ったボストンバッグを車に積み込み、那覇支部に向かった。私が5ヵ月ぶりに再び沖縄を訪問するようになった動機は去る4月に行なわれた地域総大会準備委員会である。北は北海道から南は九州までの大会関係役員代表が参加し、また教会本部からは、オーディオ関係のエバンズ長老とラブレス長老そして十二使徒評議員会補助のファイアンズ長老および小松長老が出席された。各担当の準備委員の説明および質疑応答の後、幹部が話され最後にファイアンズ長老が話された。そのとき私はすばらしい気持になった。「……それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。ところが私たちが受けたのはこの世の霊ではなく、神からの霊である。それによって神から賜わった恵みを悟るためである」（Ｉコリント２：11、12）とパウロも書いているように、私はこの集会が本当に神のみたまに満たされていることを感じた。そしてふと沖縄の兄弟姉妹たちのことが頭に浮んだ。「そうだ、せっかく多額の金と時間を費して参加するのだからあふれるほどの恵みと、霊の糧を受け入れる心の準備ができるように手伝ってあげよう」と決心し、時を移さず日航に便を予約した。

さて、ここでふたつの問題が生じた、ひとつはお金の問題、そして休暇の問題だ。5月の連休を選んだが予約が遅いので、5月2日に発って6日に帰る便しかない。2日間の休暇が必要だ。病気で長く休んだので休暇は大会用に取ってある2日だけだ。お祈りしてその方法を神様に問うた。かなえられた。普段だと公休日には完全に休みだが、どうしても4月29日（公休日）でないとだめだという商談が持ち上ってきた。私は早速「ぼくが出社します」と申し出て受け入れられた。そして5月の2日を代休にあてた。5月6日の件は沖縄の航空会社に勤める姉妹の計らいで5月5日のＶＩＰの便が取れた。

次はお金の問題だ。「……もしも世の人々が神の命令を守るならば、神はまことにこれを養いこれを強くし、また人に命じたもうことをなし遂げることができる方法を与えたもう。」（Ｉニーファイ17：３）　航空券購入日まであと2日しかない、その日に郵便受けの中に社会保険事務所からの手紙が入っていた。封を切って読むと、「青葉台郵便局に6万2千円振り込みましたのでこの証書を提出して受け取って下さい。」と書かれていた。それは先月生まれた2番目の子供の分娩費だった。私と姉妹は心から神様に感謝を捧げた。往復に必要な金額は5万3千円なので滞在費も割り出せた。それからはフィルムの予約、資料集めなどに時間を費やした。当日、姉妹と子供たちを祝福し、5時30分の日航機で沖縄に向け飛び立った次第である。さてその日は地方部長会と集会を開き、一生懸命大会のＰＲをし、証をし、また質問に答えた。しかし大会への関心が薄いことにはショックを受けた。その理由として地方部長は資料に乏しい上に、本部からは海を隔てて離れているので大会本来の目的が十分に伝わらなくて単なるユースコンファレンスと同様に考えているということだった。私が案じていた通りだった。しかし集会後は少なくとも地方部長会にその意義を伝えることができたと思った。

さて「天の窓」の映画を上映するには50分用のリールが必要であるが、地方部には置いてなかったので早速、購入するようにお願いした。地方部長は土曜日の午前中あちこちとリールを捜しに奔走したが、連休のため閉まっている店が多く、また50分用のリールは扱っていないというので代案を考えるほかに方法はないと言う。代案とは「40分用にボール紙でフィルム受けを付ける」ということだったがこのフィルムの大切さを訴え、やめてもらった。そこで私は電話帳を貸してもらい、主の助けを乞う祈りをしてから頁をめくると「沖縄映電」が目に入った。早速電話を入れた。「もしもし、私は末日聖徒イエス・キリスト教会のものですが、実は……」と用件を伝えると、「あいにくですが、今日は休みなんです。それに私は全然知らないんです。持場が違うもので……、火曜日だと係の者が出て来ますからその日にいらして下さい」という返事。あきらめずに「実は、明日、特別な集会を催すのでどうしても要るんです」と詳しく説明すると、「それでは一応いらしてみて下さい。調べてみます。」地方部長と私はすぐ車を飛ばした。中年の太った店主はあちこち掻き回して捜してくれたが50分用リールはどこにも見当らない。「やはりないようですね。すみませんね……あッ、チョット待って下さい。」と言って、自分が現在使用しているリールをプロジェクターから取りはずし「これでもよかったら、どうぞ、お貸しします」私たちは本当に主とその店主に感謝した。火曜日までには戻す約束をしてその店を後にした。

地域総大会のための特別集会は日曜日の6時から7時半までの間行なわれる。事前に、支部長会、地方部長会と会合を持って説明したので、その日は聖餐会から次第に雰囲気が盛り上がって来たのが感じられた。聖餐会終了後、この特別集会のための祈り会を持ち、集会の上に主の〝みたま〟があるようにと主の御前にぬかずいた。地方部長の司

会のもとに讃美歌の83番を歌って開会し、最初に地方部長が証をされた。それから私に証と大会の説明をするように言われた。演壇に立って見回すと12年前の会員たちの顔は数えるほどしかなかったが、それでも3つの支部から約150人位の人がこの集会のために集って来ていた。本当に降りて行って一人一人と握手したい気持にかられた。すばらしい光景だ。真理を求めてやまない人々の集まりは本当に美しいものだと思った。私の声にも思わず力が入った。

彼らの霊性に圧倒されそうだ。地域総大会が日本の会員たちにとってどんなにすばらしい祝福であり、意義深いものであるか、全身全霊で訴えた。「天の窓」の映画が上映されたとき再びすばらしい光景を目にした。会場のあちこちからすすり泣きが聞え、多くの人々がハンカチを目に当てていた。その時私はなぜこれほどまでに感動するのだろうと不思議に思った。他の場所で上映されたときはこれほど感激していた人は少なかったのに、その理由がわかった。地方部長がこう証をされたのである。「皆さん数年前、この沖縄で起こったことを覚えていらっしゃいますか。」

私は数年前の聖徒の道に載っていた証を思い出した。その頃沖縄は旱ばつにみまわれ連日断水続きだった。会員たちはしばしば断食をし主に願い求めた。主は彼らの祈りを聞かれ沖縄の地に雨を恵まれた。このとき私は本当に来てよかった、この「天の窓」はまさに沖縄の人々のために製作されたようなものだと思った。そして、あの時の感動を、感謝の気持を、決意を再び思い起こさせるために、主が私をこの沖縄の地にお遣わし下さったと強く確信した。来てよかった。私はもうあふれる涙をおさえることが出来きず閉会の歌も声にならなかった。主への感謝の気持で一杯になった私は主の御前にひざまずかずにはいられなくなり、閉会の祈りのとき、地方部長と共にひざまずいて主に感謝を捧げた。沖縄の人々に証を得させるために来た本人が強い証を得ることになった。主は弟子たちにこのように約束しておられる。「ふたり、または三人がわたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。」（マタイ18：20）

私はこのことが真実であることを皆さんの前に証します。また「……主は世の人々を救うためにいろいろな方法を用いたもうことが明らかである。」（アルマ24：29）と言ったアルマの言葉が真実であることがわかる。ここにある姉妹からいただいた一通の手紙を紹介したいと思う。

「信頼する謝花兄弟へ、沖縄の地に霊的な糧を、また主の前に強く歩む勇気を運んで下さり心から喜んでいます。兄弟の証がどれほど沖縄の兄弟姉妹に勇気を与えてくれたか、私は知ることができます。その場にいた求道者の姉妹二人は地域総大会には、教会員として参加したいとがんばっています。……以下略（原文のまま）……糸満つや子」

この教会が真実のイエス・キリストの教会であることをイエス・キリストの御名により証します。アーメン。

『神は民がどこに居っても心にかけ……』

（アルマ26：37）

小松支部
西出妙子

「総大会に出席できるよう備えて下さい。」渡辺長老からそう言われたとき、ドキッとしました。リューマチで何年もの間、どこへも出かけたことがないのに、どうして東京まで行けようか、とても不可能なことだと心で否定していました。

渡辺長老や尾崎長老は総大会に備えて祝福を施して下さり以前より元気になりました。しかし、まだ、総大会に出席したい、でもとても体力的に無理だという心の迷いがありました。そしてもうひとつ、やせ細った手足やぶざまな格好を人に見られたくないという気持と「汝、神よりも人をおそれしは悪しきことなり」という戒めの言葉とが心の中で葛藤していました。ところが4月24日、中村兄弟から「どうしてでも総大会に出席するように」という電話がありました。その電話を受けたとき、みたまが「総大会に出席する前に地方部大会に出席して備えなければいけない」と私の霊を強く促しました。金沢での地方部大会まであと3日でした。私はすぐに地方部大会に出席することを決心し、天の御父様に助けを求めて一心に祈りました。

地方部大会に出席するのは10数年ぶりでした。大杉兄弟が自動車での送り迎えを快くひき受けてくれました。

いよいよ4月27日、「すべては善し」でした。地方部大会、聖餐会、セミナリー大会、すべてが素晴らしく、みたまに満ちた大会でした。心の平安や喜びをほのぼのと感じました。まるで夢心地のような一日であり、ほんとうに素晴らしい安息日でした。帰りの自動車の窓から、美しい夕日を眺めながらその日一日をふり返り、地球に37億もの人々がいるのに、私のようなものさえ天の御父様は心にかけて下さることに驚嘆し、天の御父様の愛を深く感じました。ほんとうに天の御父様の愛や兄弟姉妹、宣教師の暖かい励ましや親切を心から感謝しています。

この経験を通して天の御父様が助けて下さるから総大会には必ず行ける、必ず行こう、生ける予言者スペンサー・W・キンボール大管長のお話が聞ける、という確信と希望が胸に満ちました。「さて、私の兄弟らよ、神は民がどこに居ってもこれを心にかけ、これを数え、自身の心に満ちている慈悲深い恩恵を全世界に及ぼしたもう。これが私の喜びであり、また私が非常に感謝するところである。私はとこしえに私の神に感謝を捧げよう。アーメン。」（アルマ26：37）

これらすべてを主イエス様の御名によってお話し致しました。アーメン。

聖徒の道
1975年7月20日発行（毎月1回20日発行）　第19巻第7号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

「イザヤの言葉は、まことに偉大なる価値あり」
とニーファイは書いている。
多くの人がイザヤの予言を理解できないでいるが、
イザヤの「予言の言葉は明るく光輝を放っている。」